高野町文化財調査報告書　第５集

金剛峯寺遺跡

KBT05－7

－高野山大学松下講堂黎明館建設工事に伴う発掘調査報告書－

2017

高野町教育委員会

（編集）公益財団法人　元興寺文化財研究所

高野町文化財調査報告書　第５集

金剛峯寺遺跡

KBT05－7

－高野山大学松下講堂黎明館建設工事に伴う発掘調査報告書－

2017

高野町教育委員会

（編集）公益財団法人　元興寺文化財研究所

調査区遠景（東から）

序

「高野山は日本国のさまざまな都鄙の中で唯一とも言える異域では無いか」（『古寺巡礼　西国高野山金剛峯寺』）と司馬遼太郎氏が書いている。江戸時代後期から商人・職人などに居住が増加しつつあったが、高野山は幾度となく大火に見舞われ、明治 21 年の大火を契機に、13 の字からなる高野村が誕生し、高野山の世俗化は急速に進むことになった。この大火による廃寺跡に、麓から上ってきた村人が住み始めるようになり、現在の町並みの原型が出現した。「上の段」と呼ばれたところには飲食店などが連なる商家として再編されたという。長い歴史の中で、我々の先祖が知性と豊かな文化を持っていた。これら先人たちの生活の跡をたどり、往時を想起し、その景観を脳裏に再現しながら調査書を拝見したいものである。

平成２９年３月

高野町教育委員会

教育長　角濱正和

目　次

第１章　調査に至る経緯・・・

図 9　第 5 トレンチ壁面土層図（S=1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
図 10　第 1 トレンチ平面図（S=1/200）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
図 11　1SD01 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
図 12　1SD02 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
図 13　1SP06・07 土層断面図（S=1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
図 14　1SX03 平面・断面見通し図（S=1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
図 15　第 2 トレンチ平面図（S=1/200）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
図 16　2SD16 土層断面図（S=1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
図 17　第 3 トレンチ平面図（S=1/200）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
図 18　3SX01 平面図（S=1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
図 19　第 4 トレンチ平面図（S=1/200）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
図 20　第 5 トレンチ平面図（S=1/200）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
図 21　第 5 トレンチ北東部遺構平面図（S=1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
図 22　5SK01 上層礫出土状況・土層断面図（S=1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
図 23　5SK02 土層断面図（S=1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
図 24　5SK03 遺物出土状況・土層断面・断面見通し図（S=1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・20
図 25　5SK04 土層断面図（S=1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
図 26　5SK07 土層断面図（S=1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
図 27　1SD01 出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
図 28　1SX03 出土遺物実測図（1）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
図 29　1SX03 出土遺物実測図（2）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
図 30　1SX03 出土遺物実測図（3）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
図 31　1SX03 出土遺物実測図（4）（S=1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
図 32　第 1 トレンチ下層包含層出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
図 33　第 1 トレンチ包含層出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
図 34　第 2 トレンチ包含層出土遺物（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
図 35　3SX01 出土遺物実測図（1）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
図 36　3SX01 出土遺物実測図（2）（S=1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
図 37　5SK01・02 出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
図 38　5SK03 出土遺物実測図（1）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
図 39　5SK03 出土遺物実測図（2）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
図 40　5SK03 出土遺物実測図（3）（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
図 41　第 5 トレンチその他の遺構、包含層出土遺物実測図（S=1/3）・・・・・・・・・・・・・・・35
図 42　『御公儀上一山図』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
図 43　『高野山絵図』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
図 44　『高野山壇上上并寺中絵図』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
図 45　『高野山壇上寺家絵図』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37

表目次

表 1　調査区周辺における既往の調査一覧 ・・・

例　言

1. 本書は、金剛峯寺遺跡において実施した高野山大学松下講堂黎明館建設工事に先立ち実施した発掘調査（KBT05-7）の成果をまとめたものである。
2. 調査地は、和歌山県伊都郡高野町高野山 385 番地で、開発面積は 27011,78㎡のうち、調査対象面積は 400㎡である。
3. 調査は高野町教育委員会が主体となり、事前の確認調査を西山祐司が担当、本発掘調査を平成 17 年 7 月 8 日から平成 17 年 8 月 20 日まで実施し、鳥羽正剛が担当した。
4. 調査地の座標及び基準点測量は澤測量が実施した。なお、座標基準は世界測地系、基準点は T.P によるものである。
5. 本発掘調査における遺構の実測作業は航空写真測量を澤測量が行い、その他実測作業については初見泰彦、深谷泰雪（株式会社島田組）が行った。
6. 発掘写真撮影については発掘調査における調査区全景、遺構、土層断面を鳥羽、出土遺物は大久保治（公益財団法人 元興寺文化財研究所）が行った。
7. 出土遺物の実測及び浄書（トレース）は、武田浩子、芝幹、仲井光代（公益財団法人 元興寺文化財研究所）が行った。
8. 本書の執筆は、第 1 章、第 2 章を池田一城（高野町教育委員会）が、その他を佐藤亜聖（公益財団法人 元興寺文化財研究所）が担当した。
9. 本書の編集は、池田、木本誠二（高野町教育委員会）、佐藤が担当した。
10. 当該調査において出土した遺物、実測図、写真は、高野町教育委員会が保管している。加えて、株式会社スタジオ三十三が行った壁面土層の剥ぎ取り標本は、学校法人高野山学園高野山大学で展示・保管している。今後のさらなる調査、研究、普及活動に資することを希望する。
11. 外業作業及び内業作業に当たっては、次の方々から貴重な助言、指導、協力をいただいた。記して感謝の意を表したい（順不同、敬称略、所属は当時）

松尾信裕（大阪城天守閣）、西山昌孝（千早赤坂村教育委員会）、石田成年（柏原市立歴史資料館）、藤井保夫、武内雅人、小田誠太郎、黒石哲男、藤井幸司、萩野谷正宏（和歌山県教育庁）、株式会社島田組、澤測量、スタジオ三十三

第 1 章　調査に至る経緯

平成 16 年 12 月 14 日、学校法人高野山学園（高野山大学）から高野町教育委員会に対して、大学構内に所在する松下講堂の解体及び新規建設工事に伴う埋蔵文化財発掘の届出が提出された。これを受けて高野町教育委員会では、和歌山県教育委員会の指示事項により確認調査を実施し、和歌山県教育委員会と協議の結果、記録保存のための本発掘調査を実施する運びとなった。平成 17 年度は、町が株式会社島田組と外業作業（発掘作業）と調査補助作業に関して委託契約を締結し、平成 17 年 7 月 8 日から現地調査を開始、平成 17 年 8 月 20 日に終了した。

平成 24 年度において町が財団法人元興寺文化財研究所（理事長　辻村泰善）（現公益財団法人　元興寺文化財研究所）に内業作業（遺物整理作業）に関して委託契約を平成 24 年 4 月 1 日付けで締結し、その翌平成 25 年度において、報告書作成業務に関して委託契約を平成 25 年 4 月 1 日付けで締結し、平成 26 年 3 月 31 日まで履行し、全ての作業を終了した。その後、平成 28 年度に高野町の事業として印刷、刊行を行った。

現地調査体制

調査主体 : 高野町教育委員会

教　育　長　目黒威徳
教　育　次　長　辻本　一
次　長　補　佐　下　勝己
社会教育係長　中上浩貴
社会教育係文化財担当　西山祐司　鳥羽正剛（以上現地調査担当）

整理体制

調査主体：高野町教育委員会

教　育　長　角濱正和
教　育　次　長　中西　健
次　長　補　佐　南　明人
社会教育係長　田中宏人
社会教育係文化財担当　池田一城　木本誠二

公益財団法人元興寺文化財研究所

理事長　辻村泰善
所　長　坪井清足（平成 24 年度）、水野正好（平成 25 年度）、辻本泰善（平成 26 年度～）
文化財調査研究修復グループ　グループリーダー　金子正子（平成 27 年度）
考古学研究室　室　長　伊藤健司（平成 24 ～ 26 年度）
主任研究員　佐藤亜聖
研　究　員　村田裕介

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境（図１）

金剛峯寺遺跡は、和歌山県伊都郡高野町高野山に所在する。地理的には、紀伊半島の尾根である大峰山系の西側に並ぶ南北に連なる山脈からさらに西側に派生する長峰山脈の北東部に位置し、周囲には標高約 1,000m を越える峰々が聳え立っている。高野山が属する長峰山脈は紀ノ川を挟んだ南岸に位置しており、紀ノ川の流路はそのまま中央構造線に相当する。よく知られているように、中央構造線を挟んだ南北では地質構造は大きく異なっており、北岸は和泉砂岩に代表される上部白亜系和泉層群、南岸は変成岩によって構成される三波川帯が存在する。高野山周辺の地質は三波川帯に特徴的な結晶片岩類を母岩とする基盤と、その破砕性堆積物によって形成されているといえる。

高野山は古くから宗教的な意味合いにおいて、蓮華の花弁に喩えられた「外八葉」と呼ばれる峰々に囲まれた山上盆地であり、高野山の周囲を巡る古道である「高野山女人道」は、それら８つの峰々を巡るように構成されている。また「内八葉」という表現もあるが、これについては高野山上、伽藍周辺を中心にそれを取り囲む丘陵を指していると考えられる。

また、高野山には蓮華谷、千手院谷など「谷」がつく地名が多いが、これは高野山が周囲を峰々に囲まれた山上盆地であるため、谷状地形が多いことに起因しており、高野山がそれぞれの谷を切り拓いて形成されてきたことを物語っているといえる。こうしたことを裏付けるように、山内の発掘調査では各地で整地土の累積が見つかっており、また、伽藍中心部である中門再建事業に伴う発掘調査（図４－20、表１－20）などでは、ベースとなる無遺物層が滞水性の粘土堆積であることが確認されており、金剛峯寺創建以前は親水性の湿地地形であったことが想定される。

調査地は金剛峯寺遺跡の南側、高野山のなかでも総本山金剛峯寺に比較的近い位置に所在している。そのため高野山のなかでも中心的な位置にあると言ってよい。

第２節　歴史的環境

（1）高野山の歴史的環境の概要

高野山は弘法大師空海（774 – 835）が唐から帰朝後、嵯峨天皇から高野の地を下賜され、真言密教の根本道場として弘仁７（816）年に開創したことから始まる。その後、空海が奥院に入定して以後は、11 世紀頃から高野浄土信仰が当時流布していた末法思想への対応として貴賓・貴族のあいだで広まり、権力者による高野参詣が相次いだ。例えば治安３（1023）年の藤原道長、永承３（1048）年の藤原頼通などが挙げられ、さらに白河上皇にいたっては、寛治２（1088）年及び同５（1091）年と、２度にわたり高野参詣を行っている。

彼ら権力者による高野参詣は高野浄土信仰を全国的なものとしたと考えるうえで重要な事績であるが、それら以外にも、15 世紀頃から活動が活発化した高野聖による勧進、唱導活動などにより、宗教上の聖地としての高野山の存在とそれに伴う信仰は次第に全国的に認知されるようになり、広く一般庶民層にまで拡大していく。庶民層を含む高野参詣が最も活発化した時期は近世期であると考えられ、高野山に接続する道としては高野山町石道のほかに京大坂道があるが、後者については近世後期における高野山麓の集落が宿場町として発展していたこ

図１　高野山の位置（S=1/50,000）

とを考えても、近世中後期における高野参詣が非常に活発であったと考えることができる。

しかし、明治期に入ると高野山は困窮の時期を迎えることになる。廃仏毀釈により寺院と僧侶が激減すると共に、それまでの高野山における経済基盤の多くを占めていた寺領が国に返還されることになり、高野山は経済的に大きな打撃を受けることとなった。さらに追い打ちをかけるように明治 21（1888）年には高野山上で大火が生じ、子院 70 ヶ寺、町屋 70 戸を焼失する。その後は、子院は 130 ヶ寺に統廃合され、最終的には 117 ヶ寺となって現在に至っている。

平成 16 年 6 月には高野山のうち、大門地区、伽藍地区、本山地区、金剛三昧院地区、徳川家霊台地区、奥院地区の 6 ヵ所と、参詣道として高野山町石及び熊野参詣道小辺路がユネスコの世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」として登録され、高野山が培ってきた歴史・文化が普遍的な価値を有するものとして評価された。更に平成 28 年 10 月には高野参詣道 黒河道、京大坂道不動坂、女人道が追加登録され、現在では参詣者、巡礼者だけでなく、国内外を問わず年間約 100 万人のゲストが訪れる、観光と信仰が混在した宗教都市としての性格をそなえている。

（2）調査地の歴史的環境の概要

調査地は、金剛峯寺遺跡だけを俯瞰的に見た場合は南側に位置しているが、総本山金剛峯寺と比較的近い場所に所在しているため、高野山としては中心部になる。現在は高野山大学構内となっているが、調査地の歴史的変遷は多少の紆余曲折を辿っている。

1）近世期

まず古絵図を資料として調査地を眺めてみると（図 2、図 3）、北に青巌寺と興山寺（金剛峯寺の前身）が見え、西に天徳院が所在しているのがわかる。3 寺院ともに現在も同位置に所在しているため、近世期における今回の調査地については概ねの位置が判別できる。

近世期における調査地には、金蔵院という比較的規模の大きい寺院が西側に所在し、その東側一帯には数ヶ寺の寺院が建立されていたようである。また南側から迫る丘陵については現在の地形とほぼ変わらないと考えられる。

また、高野山上を構成する谷々としては、調査地は天保 10（1839）年の『紀伊続風土記』及び文化 8（1811）年の『紀伊国名所図会』の記述に基づけば小田原谷に属すると考えられるが、調査地西側の南北に通る道を隔てた場所に所在する天徳院は、南谷のうち西光院谷に属している。ちなみに調査地一帯に見られる寺院群は、高野三派のうち行人方に属することが『高野山壇上及び寺家絵図』（図 2）からわかる。

以上のように近世期の調査地には、金蔵院をはじめとして数ヶ寺の子院が存在していたのは確かなようである。

2）近現代期

近代期において調査地は大きな変化を受ける。近代初頭の調査地は「上の段」と呼ばれ、飲食店などの商家が軒を連ねていた。この「上の段」自体の意味合いについては不明なところが多く、実際は近世後期に編纂された『紀伊国名所図会』の挿絵にも「上ノ段」と明記されていることが認められるのだが、そこでは子院以外の建造物などは描かれていないため、前述したように近世期には子院群のみが存在していたと考えられる。ではいつ頃から商家群に変貌したのかという疑問が残るが、おそらくは幕末頃から次第に商家に移り変わり、明治 5（1872）年の太政官令による女人禁制解除などを契機として商家の建設が相次いだのではないかと考えられる。たとえば明治 14（1881）年には、調査地である上の段に個人経営の女人参籠所が建設されており、宿泊料を徴収している。また、大正年間における調査地における商家の数は、少なくとも 20 軒を超える程度が存在しており、相応

図２　『高野山壇上及び寺家絵図』　宝永３（1706）年、金剛峯寺蔵

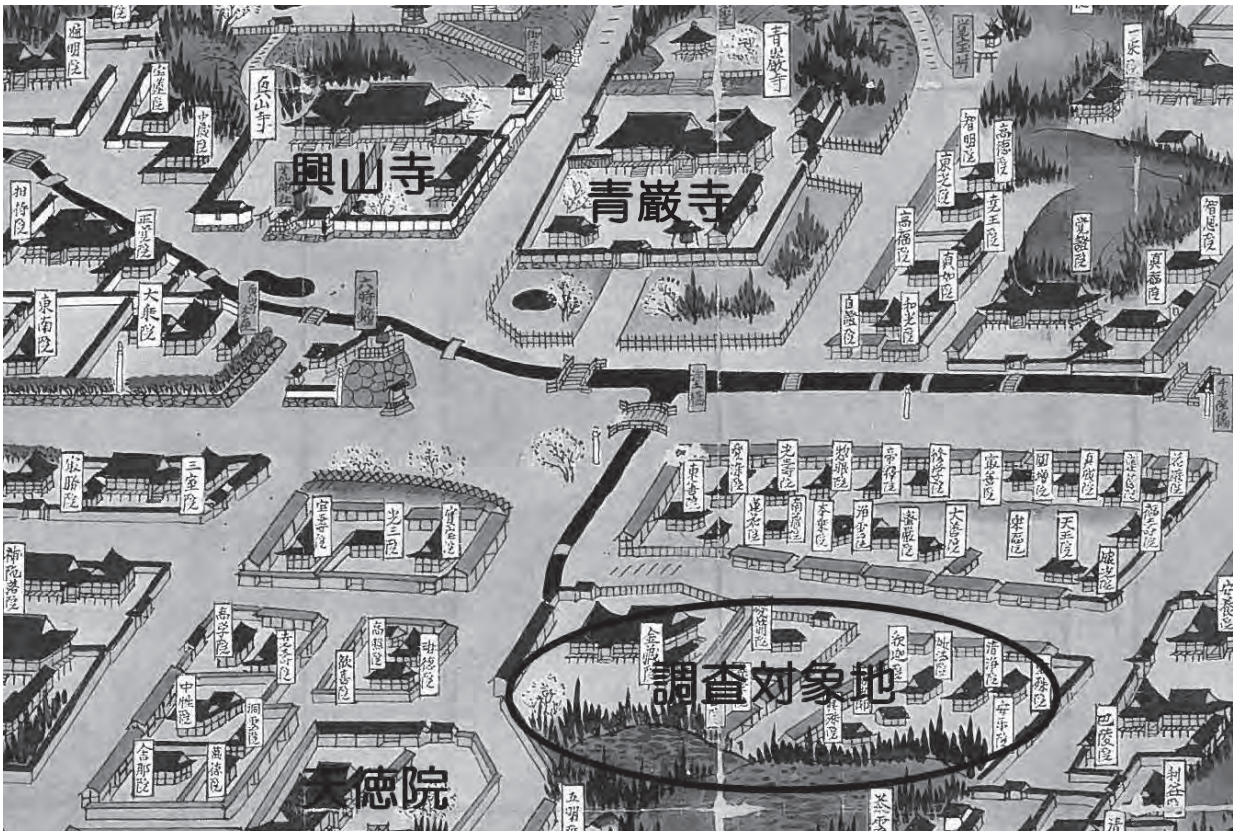


図３　『高野山全山及び周辺の絵図』　文化８（1811）年、赤松院蔵

の活況を呈していたと考えられる。

このように調査地は、近世期までの子院群、近代初頭にける商家群と変遷してきたわけだが、同地には昭和期において、それまで金剛峯寺西側（現在の金剛峯寺新別殿付近）に所在していた高野山大学の建設及び移転が決定する。概略だけを示すと、まず昭和 4（1929）年に図書館及び校舎が建設され、講堂については昭和 7（1932）年に移転が完了、学生ホールについては昭和 8（1933）年に建設されている。大学施設の建設及び移転に伴い、それまで上の段として存在していた商家群は高野山の北東に位置する鶯谷に移転を余儀なくされたが、立ち退きが遅れた、または拒んだ（実情については不明）商家もあったようで、例えば『高野山年表昭和編』には、昭和 6（1931）年 6 月 17 日の出来事として、「大学校舎付近ニ民家山城屋山利商店退きを目標に学生デモ決行」とあることから、調査地が大学構内に変容していくなかでもいまだ商家の存在は残っていたようである。

以上みてきたように調査地は、近世の子院群から近代初頭の商家群、高野山大学という大きな歴史的変遷を経験してきた場所である。なかでも興味深いのは、近世から近代へと移り変わるなかで、子院群から商家群へ当地が変容したことであろう。実際に、今回の発掘調査においても、近世期の遺構・遺物の他にも、近代期における生活雑器、女性用と思われる櫛や下駄などが含まれており、近世以前に比べて比較的調査・研究が少ない高野山の近代史を考えるうえで非常に興味深い資料といえる。

【参考文献】

仁井田好古 1970『紀伊続風土記（五）』歴史図書社

高市志友・加納諸平 1970『紀伊国名所図会（二）』歴史図書社

高野山大学百年史編纂室 1986『高野山大学百年史』高野山大学

山口耕栄 1976『高野山年表昭和編』高野山大学出版部

日野西眞定 1988『高野山古絵図集成』タカラ写真製版株式会社

第３節　既往の調査（図４）

調査地周辺における既往の調査は表１の通りである。近隣では 1984 年に、北側に隣接する高野山大学校舎新築に伴い発掘調査が行われている（10）。この調査では多数の一石五輪塔をはじめとする石塔類、陶磁器類が出土しており、絵図では明確でない坊院の存在が推定できた。また、金剛峯寺宝性院の調査（5）で見つかったものと同じ形状の、折敷に土師器皿を配した地鎮遺構が見つかっている。

このほか、今回の調査地の道路を挟んだ北側では、紀陽銀行高野山支店の新築に伴い発掘調査が行われている（14）。ここでは近世を中心に上・中・下の３面の遺構が確認され、最も古い遺構は 15 世紀代のものと報告されている（和歌山県文化財センター 1991『金剛峯寺遺跡発掘調査概報』）。中世の遺構は希薄で、本次報告内容と共通する部分であり、小田原通沿いの開発時期について示唆を与える。

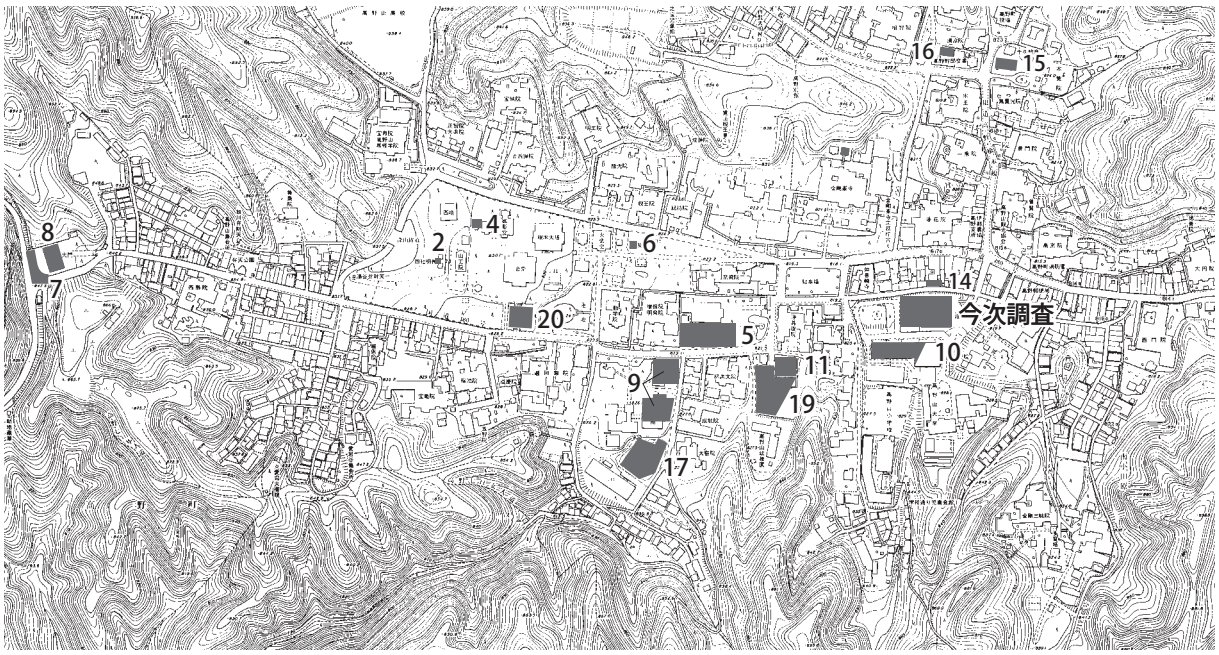


図４　調査の位置と周辺の既往調査（S=1/10,000）

表１　調査区周辺における既往の調査一覧

番号	調査年度	史跡・遺跡	調査原因	調査主体
1	1962～1964	史跡金剛峯寺境内	奥院御廟周辺の整備	和歌山県教育委員会・（財）高野山文化財保存会
2	1977	史跡金剛峯寺境内	山王院本殿、丹生明神社、高野明神社、総社修理	（財）高野山文化財保存会
3	1977	史跡金剛峯寺境内	第二灯籠堂建設	（財）高野山文化財保存会
4	1977	史跡金剛峯寺境内	孔雀堂再建解体修理	（財）元興寺文化財研究所
5	1980	金剛峯寺遺跡	教化研修道場建設	（財）元興寺文化財研究所
6	1980	史跡金剛峯寺境内	東塔再建	（財）元興寺文化財研究所
7	1981	史跡金剛峯寺境内	大門前道路拡幅	（財）元興寺文化財研究所
8	1981・1983	金剛峯寺遺跡	大門解体修理	（財）高野山文化財保存会
9	1982・1983	金剛峯寺遺跡	霊宝館新収蔵庫及び駐車場建設	（財）和歌山県文化財センター
10	1984	金剛峯寺遺跡	高野山大学校舎改築	（社）和歌山県文化財研究会
11	1985	金剛峯寺遺跡	尼僧研修道場建設	（社）和歌山県文化財研究会
12	1988	史跡金剛峯寺境内	真然堂修理及び周辺整備	（財）高野山文化財保存会
13	1989	金剛峯寺遺跡	南都銀行高野山支店新築	（財）和歌山県文化財センター
14	1990	金剛峯寺遺跡	紀陽銀行高野山支店新築	（財）和歌山県文化財センター
15	1992	金剛峯寺遺跡	防災施設貯水槽新築	（財）和歌山県文化財センター
16	1992	金剛峯寺遺跡	警察庁舎建設	（財）和歌山県文化財センター
17	2002	金剛峯寺遺跡	八大童子等保存施設建設	関西文化財調査会
18	2005	金剛峯寺遺跡	高野山松下講堂新築	高野町教育委員会
19	2005	金剛峯寺遺跡	大乗院駐車場整備工事	高野町教育委員会
20	2006	史跡金剛峯寺境内	伽藍中門再建工事	高野町教育委員会・（財）元興寺文化財研究所

第３章　調査の成果

第１節　調査区の配置と基本層序

（1）調査区の配置（図５）

調査区の設定にあたっては、工事側との綿密な調整を行い、工事範囲のうち遺構の残存が考えられる地点を中心に第１～５トレンチを設置した。第１トレンチは最も東に位置し、東西約 9m、南北約 24m、面積約 114㎡、第２トレンチは東西約 19m、南北約 6m、面積約 114㎡、第３トレンチは東西約 4m、南北約 11m、面積約 40.5㎡、第４トレンチは東西約 4m、南北約 11m、面積約 40.5㎡、第５トレンチは東西約 10m、南北約 21m、面積約 140㎡である。

（2）基本層序

第１トレンチ（図６）

現状地表下には層厚約 40 ～ 70cm 程度、現代の盛土が行われている。現代盛土直下には層厚約 40 ～ 50cm の近代遺物を含む礫混じり砂が存在しており、近代以降の整地土と考えられる。この整地土を除去したところで上層遺構面を検出した。遺構面の標高は 822.8m 前後である。

上層遺構のベースとなっている礫混じり砂層は少量の遺物を含み、ブロック構造を持つことから整地土と考えられ、さらに下層に遺構が存在するものと考えられる。下層遺構については工事による掘削が及ばず、保護層も確保できたため部分的掘削にとどめている。近代整地土上からも近現代の遺構が多く切り込むが、今回は報告の対象としていない。

第２トレンチ（図７）

第１トレンチ同様、現表土直下より層厚約 30 ～ 50cm 程度の現代盛土が存在する。盛土直下には層厚 30cm 前後の細砂が存在する。この細砂は近代の遺物を含み、ブロック構造を持つ人為的堆積層で、整地土と考えられる。この整地土を除去した直下は地山であり、この地山上面で遺構を検出した。遺構面はほぼ水平で、検出面の標高は 823.1m 前後である。

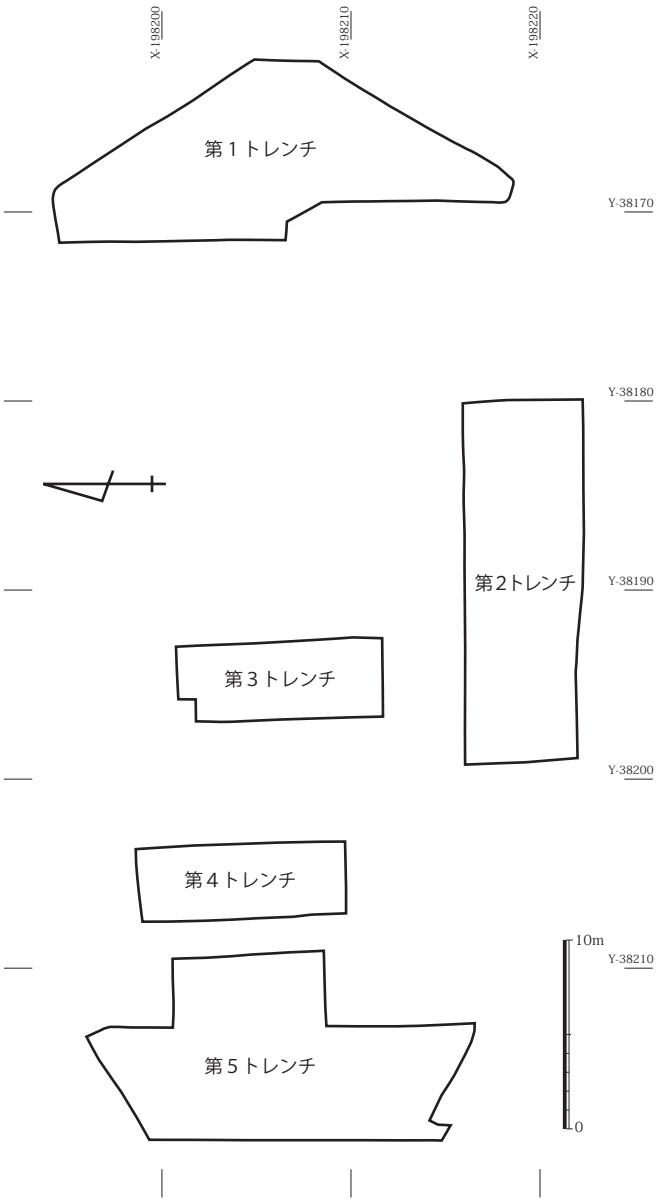
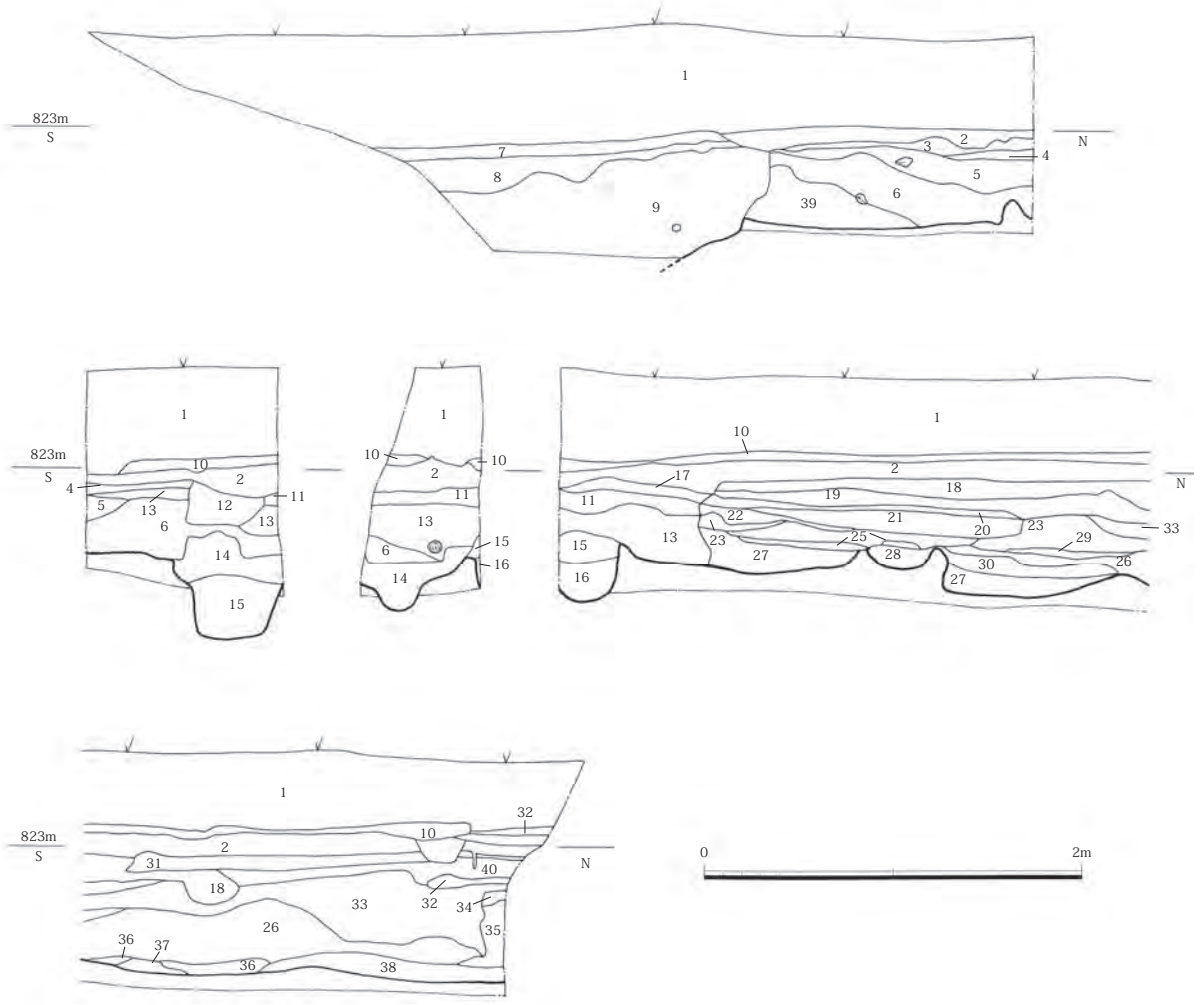
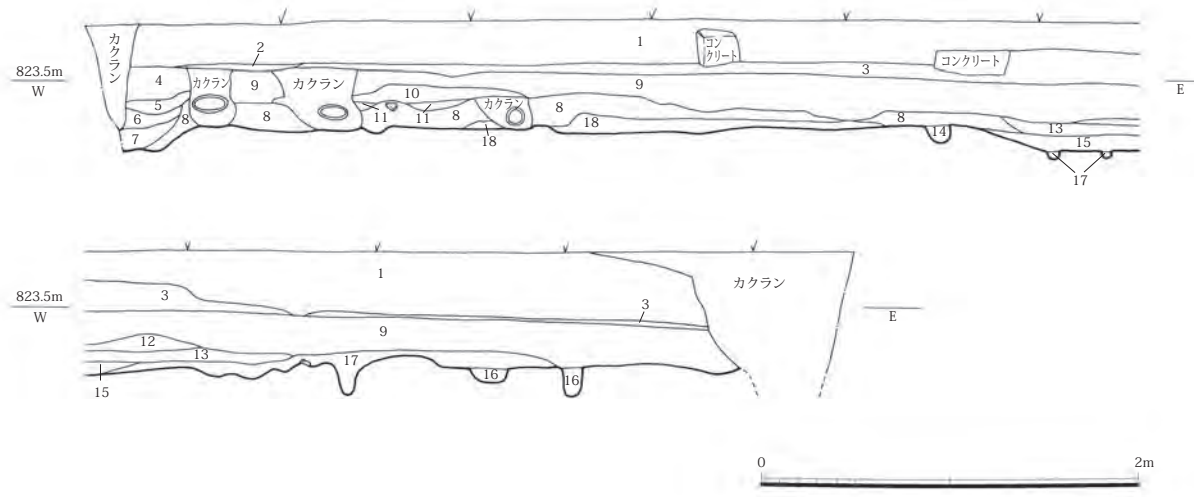


図５　調査区の配置（S=1/400）



1.　盛土
2.　5YR6/4（赤褐）礫混細砂
3.　5YR2/3（極暗赤褐）礫混細砂
4.　7.5YR3/4（暗褐）礫混細砂、炭化物・赤変焼土塊多く含む
5.　2.5Y4/2（暗灰黄）礫混粗砂
6.　10YR4/3（にぶい黄褐）礫混細砂
7.　10YR5/8（黄褐）礫混粗砂
8.　10YR3/2（黒褐）礫混粗砂
9.　10YR5/3（にぶい黄褐）礫混粗砂
10.　2.5Y4/2（暗灰黄）礫混粗砂
11.　7.5YR4/3（褐）礫混粗砂
12.　7.5YR4/2（灰褐）粗砂混礫
13.　10YR5/4（にぶい黄褐）礫混粗砂
14.　10YR6/4（にぶい黄橙）礫混粗砂
15.　2.5Y5/2（暗灰黄）礫混シルト
16.　2.5YR4/2（暗灰黄）礫混細砂
17.　10YR3/4（暗褐）礫混粗砂
18.　2.5Y4/2（暗灰黄）礫混細砂
19.　10YR4/4（褐）礫混細砂
20.　10YR5/8（黄褐）礫混シルト
21.　2.5Y4/3（オリーブ褐）粗砂
22.　2.5Y4/2（暗灰黄）礫混細砂
23.　2.5Y4/3（オリーブ褐）礫混粗砂
24.　2.5Y3/2（黒褐）礫混細砂
25.　2.5Y4/4（オリーブ褐）シルト
26.　10YR3/4（暗褐）礫混シルト
27.　2.5Y3/1（黒褐）粗砂混細砂、植物遺体多く含む
28.　2.5Y4/1（黄灰）粗砂混シルト
29.　10YR3/2（黒褐）礫混シルト
30.　2.5Y4/2（暗灰黄）礫混シルト
31.　2.5Y7/8（黄）礫
32.　7.5YR6/4（にぶい橙）礫混粗砂
33.　10YR4/3（にぶい黄褐）礫混細砂
34.　7.5YR5/6（明褐）礫混粗砂
35.　7.5YR5/4（にぶい褐）細砂
36.　10YR4/2（灰黄褐）礫混粘土
37.　10YR5/3（にぶい黄褐）礫混シルト
38.　10YR2/1（黒）礫混粘土
39.　7.5YR3/4（暗褐）礫混細砂、炭化物・赤変焼土塊多く含む
40.　7.5YR4/3（褐）礫混粗砂、炭化物・赤変焼土塊多く含む
地山　7.5YR6/6（橙）礫混シルト

図６　第１トレンチ壁面土層図（S=1/40）



1. 表土
2. 10YR4/6（褐）礫混細砂（松下講堂以前の構造物のタイルなど多く含む、昭和初期か）
3. 2.5Y3/3（暗オリーブ褐）礫混細砂
4. 7.5YR4/4（褐）礫混細砂
5. 10YR4/6（褐）礫混シルト
6. 10YR5/4（にぶい褐）礫混シルト
7. 10YR5/4（にぶい褐）シルト
8. 10YR4/4（褐）細砂
9. 7.5YR4/3（褐）礫混細砂
10. 10YR4/3（にぶい黄褐）礫混細砂、炭化物少し含む
11. 10YR4/6（褐）礫
12. 7.5YR4/3（褐）礫
13. 7.5YR5/6（暗褐）礫混細砂
14. 10YR4/6（褐）粗砂混シルト
15. 7.5YR4/4（褐）粗砂混シルト
16. 10YR2/3（黒褐）粗砂混シルト、炭化物少し含む
17. 10YR3/4（暗褐）シルト
18. 10YR5/3（にぶい黄褐）礫混シルト、炭化物少し含む

地山　10YR8/6（黄橙）礫混シルト

図 7　第 2 トレンチ壁面土層図（S=1/40）

第 3 トレンチ（図 8）

他トレンチ同様、現表土直下より層厚約 30 ～ 50cm 程度の現代盛土が存在する。盛土には色調・粒径の異なるもの（3・4 層）も混在する。盛土直下には層厚 40 ～ 50cm 前後の細砂が存在する。この細砂は近代の遺物を含み、ブロック構造を持つ人為的堆積層で、整地土と考えられる。この整地土を除去した直下は地山であり、この地山上面で遺構を検出した。遺構面はほぼ水平で、検出面の標高は 823.1m 前後である。

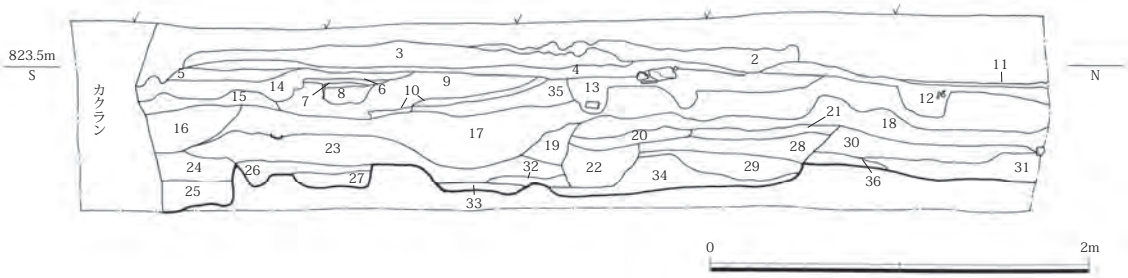
第 4 トレンチ（図 8）

攪乱が激しく、土層の状態は良好でない。層厚約 10 ～ 40cm 程度の現代盛土が存在し、直下には火災層（東壁面 2 層）が存在する。火災層は含まれる遺物から明治 22（1888）年の火災によるものである可能性が高い。火災層直下には層厚 40cm にわたって近代の遺物と炭化物や焼土を含む細砂層が連続する。近代整地土の累積と考えられる。これらを除去した直下が地山面であり、地山上面で遺構を検出した。遺構面はほぼ水平で、検出面の標高は 823.0m 前後である。

第 5 トレンチ（図 9）

他トレンチと異なり、現代盛土は層厚約 10cm 程度と著しく薄いが、現代の攪乱が著しく、近代以降の整地土の残存は良好でない。現代盛土直下には近代の遺物を含む焼土（4 層）が存在し、第 4 トレンチで検出した明治 22（1888）年の火災層と考えられる。火災層以下には層厚 50 ～ 60cm の近代整地土の累積が確認でき、これらを除去した直下に地山が存在する。地山面直上には江戸時代後期の遺物を含む火災層が存在しており、文化 6（1809）年もしくは天保 4（1843）年の火災層である可能性がある。遺構面の標高は 823.1 ～ 823.2m で、北側にわずかに傾斜する。

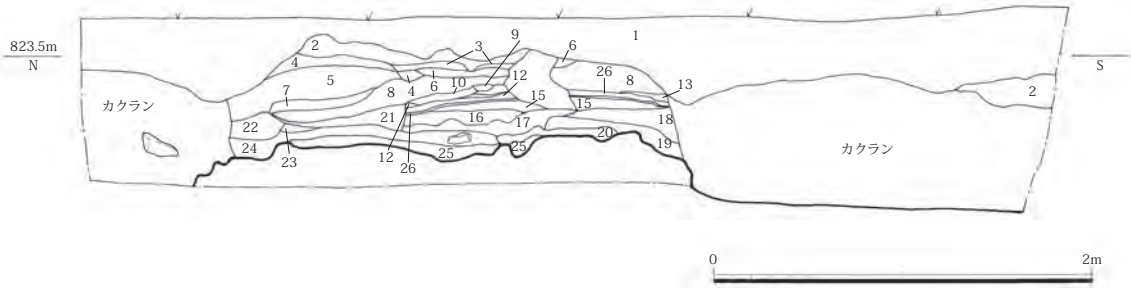
第３トレンチ



1. 表土
2. 7.5YR4/2（灰褐）礫混細砂
3. 7.5YR5/6（明褐）細砂混礫
4. 10YR4/2（灰黄褐）礫混粗砂
5. 10YR5/3（にぶい黄褐）礫混細砂
6. 10YR4/1（褐灰）細砂
7. 10YR5/4（にぶい黄褐）礫混細砂
8. 10YR5/3（にぶい黄褐）細砂
9. 5YR5/6（明赤褐）細砂混礫、炭化物少し含む
10. 10YR4/3（にぶい黄褐）礫混細砂、炭化物少し含む
11. 10YR3/1（黒褐）礫混細砂
12. 7.5YR3/1（黒褐）礫混細砂
13. 10YR3/4（暗褐）礫混粗砂
14. 10YR5/4（にぶい黄褐）礫混細砂
15. 10YR4/3（にぶい黄褐）礫混細砂
16. 10YR4/6（褐）礫混粗砂、炭化物少し含む
17. 2.5YR4/6（赤褐）礫混細砂
18. 10YR4/3（にぶい黄褐）礫混細砂、炭化物少し含む
19. 7.5YR5/4（にぶい褐）礫混細砂
20. 10YR6/4（にぶい黄橙）礫混細砂
21. 10YR4/3（にぶい黄褐）礫混細砂
22. 10YR5/8（黄褐）礫混シルト
23. 7.5YR4/3（褐）礫混シルト、炭化物・赤変焼土塊少し含む
24. 10YR4/3（にぶい黄褐）礫混シルト
25. 7.5YR4/3（褐）礫混細砂
26. 5YR4/3（にぶい赤褐）礫混細砂
27. 7.5YR5/4（にぶい褐）礫混細砂、炭化物少し含む
28. 7.5YR6/4（にぶい橙）礫混細砂
29. 10YR5/8（黄褐）礫混粘土
30. 10YR4/6（褐）礫混細砂
31. 10YR4/3（にぶい黄褐）礫混シルト
32. 10YR5/6（黄褐）礫混シルト、炭化物少し含む
33. 10YR6/3（にぶい黄褐）礫混細砂
34. 10YR4/4（褐）礫混シルト、炭化物少し含む
35. 7.5YR4/4（褐）礫混細砂、炭化物多く含む
36. 7.5YR5/3（にぶい褐）礫混粗砂

地山　10YR8/6（黄橙）礫混シルト

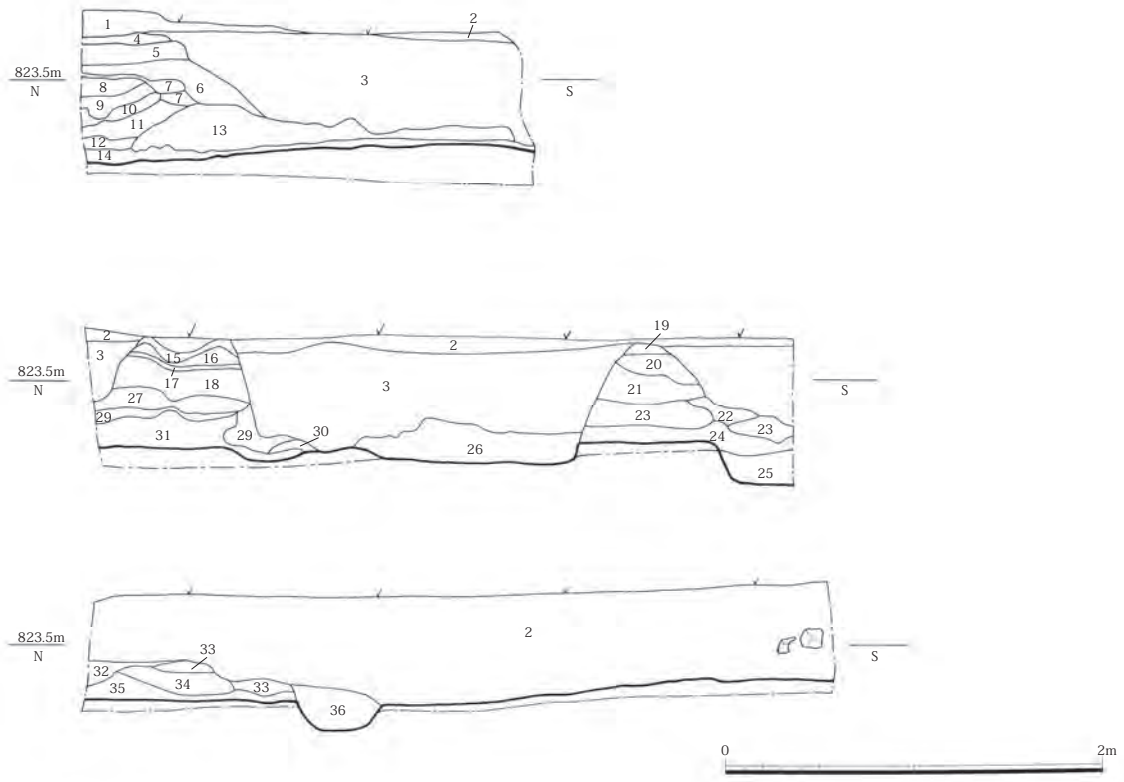
第４トレンチ



1. 表土
2. 5YR4/8（赤褐）礫混粗砂（赤変酸化層、明治 22（1888）年か）
3. 7.5YR4/4（褐）礫混粗砂
4. 7.5YR2/1（黒）礫混細砂
5. 7.5YR3/2（黒褐）礫混細砂、炭化物・赤変焼土塊多く含む
6. 10YR4/2（灰黄褐）礫混粗砂、炭化物・赤変焼土塊少し含む
7. 10YR4/3（にぶい黄褐）礫混細砂、炭化物・赤変焼土塊多く含む
8. 10YR4/2（灰黄褐）礫混細砂、炭化物多く含む
9. 10YR4/3（にぶい黄褐）礫混細砂、炭化物・赤変焼土塊多く含む
10. 2.5Y4/2（暗灰黄）礫混シルト、炭化物・赤変焼土塊少し含む
11. 2.5Y4/3（オリーブ褐）礫混細砂、炭化物少し含む
12. 7.5YR6/8（橙）礫混細砂（整地層）
13. 10YR7/6（明黄褐）礫
14. 2.5Y2/1（黒）礫混細砂、炭化物多く含む
15. 2.5Y5/4（黄褐）礫混粗砂
16. 10YR4/6（褐）礫
17. 10YR4/3（にぶい黄褐）礫混シルト
18. 10YR5/4（にぶい黄褐）礫混シルト、炭化物少し含む
19. 10YR5/3（にぶい黄褐）礫混シルト
20. 2.5Y4/4（オリーブ）礫混シルト
21. 10YR4/4（褐）礫混細砂
22. 10YR4/3（にぶい黄褐）礫混粗砂
23. 10YR3/4（暗褐）礫混細砂
24. 10YR4/6（褐）礫混細砂
25. 7.5YR3/3（暗褐）礫混シルト（遺構埋土）
26. 2.5YR4/9（赤褐）礫混粗砂（層上部は赤変酸化層、層下部は黒変酸化層）
27. 10YR2/3（黒褐）粗砂混細砂、炭化物・赤変焼土塊多く含む
（焼土層、文化 6（1809）年か天保 14（1843）年の火災跡か）
28. 10YR5/3（にぶい黄褐）礫混シルト
29. 10YR6/4（にぶい黄橙）粗砂混礫

地山　10YR8/6（黄橙）礫混シルト

図８　第３・４トレンチ壁面土層図（S=1/40）



1. 砕石
2. 表土
3. 10YR6/4（にぶい黄橙）粘土
4. 2.5YR5/8（明赤褐）混礫細砂
5. 10YR4/2（灰黄褐）礫混細砂 炭化物少し含む
6. 10YR4/3（にぶい黄褐）礫混粗砂
7. 10YR4/1（褐灰）礫混細砂
8. 10YR6/4（にぶい黄橙）礫
9. 10YR4/1（褐灰）礫混細砂 炭化物・赤変焼土塊多く含む
10. 7.5YR4/4（褐）礫
11. 10YR4/6（褐）礫混細砂 炭化物少し含む
12. 10YR3/1（黒褐）礫混粘土
13. 10YR4/4（褐）粗砂混細砂、炭化物少し含む
14. 2.5Y4/3（オリーブ褐）粘土、炭化物少し含む
15. 10YR3/2（黒褐）礫混細砂
16. 10YR3/1（黒褐）粗砂混細砂
17. 5YR1.7/1（黒）細砂 比熱により黒変
18. 7.5YR4/2（灰褐）礫混粗砂
19. 10YR4/3（にぶい黄褐）礫混粗砂
20. 7.5YR4/3（褐）礫混細砂 炭化物少量含む
21. 7.5YR4/4（褐）礫混粘土 炭化物少量含む
22. 7.5YR5/4（にぶい褐）礫混粘土
23. 7.5YR6/4（にぶい橙）礫
24. 10YR5/3（にぶい黄褐）礫混シルト 炭化物少量含む
25. 10YR6/4（にぶい黄褐）礫混細砂
26. 7.5YR7/6（明黄褐）礫
27. 10YR5/4（にぶい黄褐）礫混細砂、炭化物、赤変焼土塊多く含む
28. 7.5YR5/6（明褐）礫
29. 10YR3/4（暗褐）礫混粗砂、炭化物少量含む
30. 10YR6/4（にぶい黄褐）粘土
31. 2.5Y4/3（オリーブ褐）粘土、炭化物少し含む（14 と類似）
32. 10YR4/2（灰黄褐）礫混細砂 炭化物少し含む
33. 10YR5/4（にぶい黄褐）礫混細砂
34. 10YR4/6（褐）礫混細砂 炭化物少し含む
35. 10YR4/4（褐）礫混シルト 炭化物少し含む
36. 10YR4/3（にぶい黄褐）礫混シルト

地山　10YR5/6（黄褐）細砂混礫

図 9　第 5 トレンチ壁面土層図（S=1/40）

第 2 節　検出遺構

遺構の表記は S の前に各トレンチナンバーを配する。

（1）第 1 トレンチ検出遺構（図 10）

溝

1SD01（図 11）

調査区東端付近に位置する石組み溝。調査区西端でわずかに屈曲し、北側と東側の二方向に分岐する。北端部はやや膨らみを持って水溜状に収まる。内法幅 30 ～ 50cm、深さ 15 ～ 25cm を測り、全面に径 10 ～ 30cm の礫を積む。礫は検出段階では一～二段が残存する。溝底部には一部に板材が残存し、敷板が敷かれていたと考えられる。敷板と礫の前後関係は詳らかでない。埋土はいずれも礫を含む砂を主とする。

19 世紀半ばの遺構と考えられる。

1SD02（図 12）

調査区北半に位置する石組み溝。南端を 1SX03 に切られるように見えるが、1SX03 掘方と一体化しており、

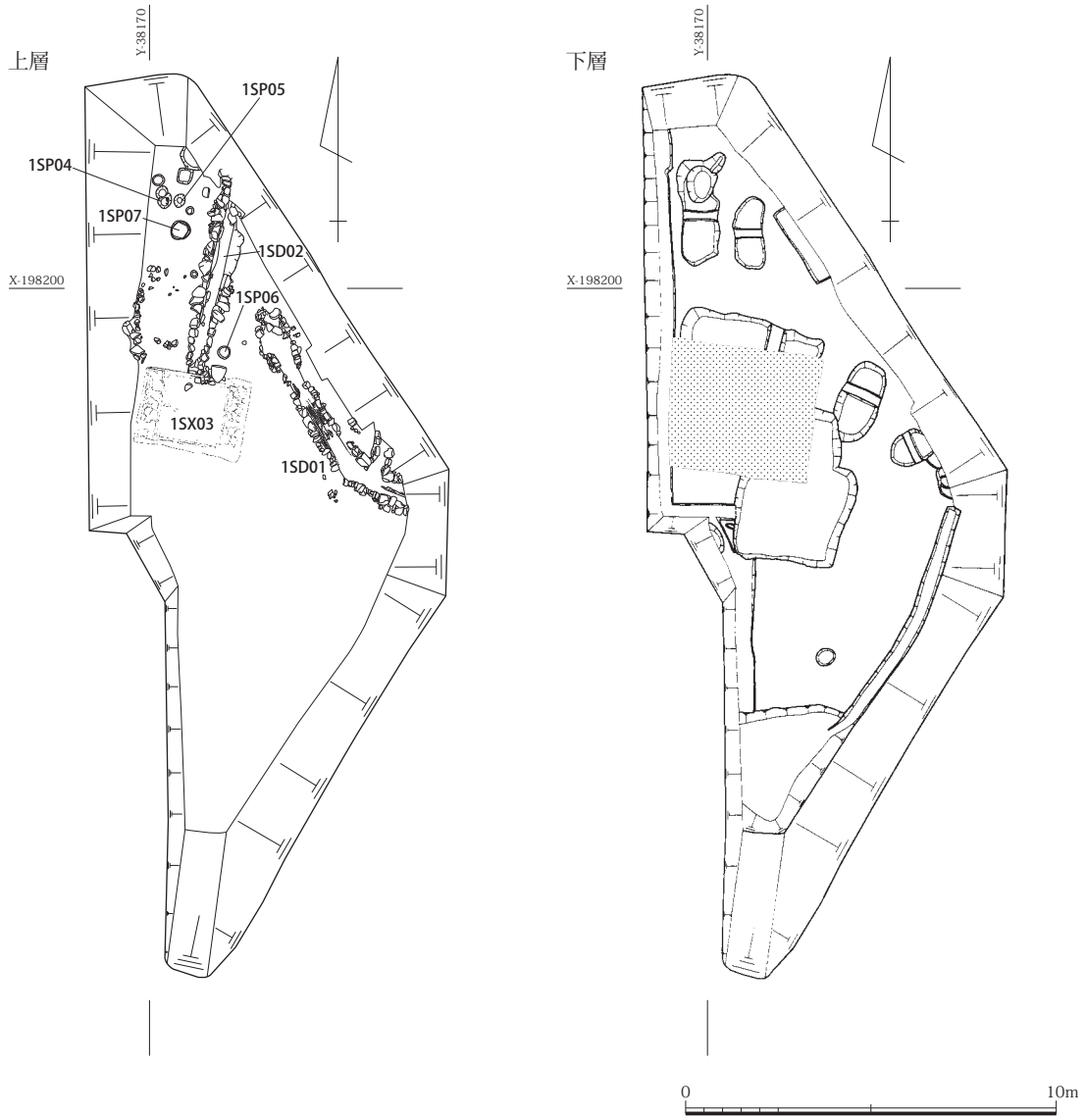


図 10　第 1 トレンチ平面図（S=1/200）

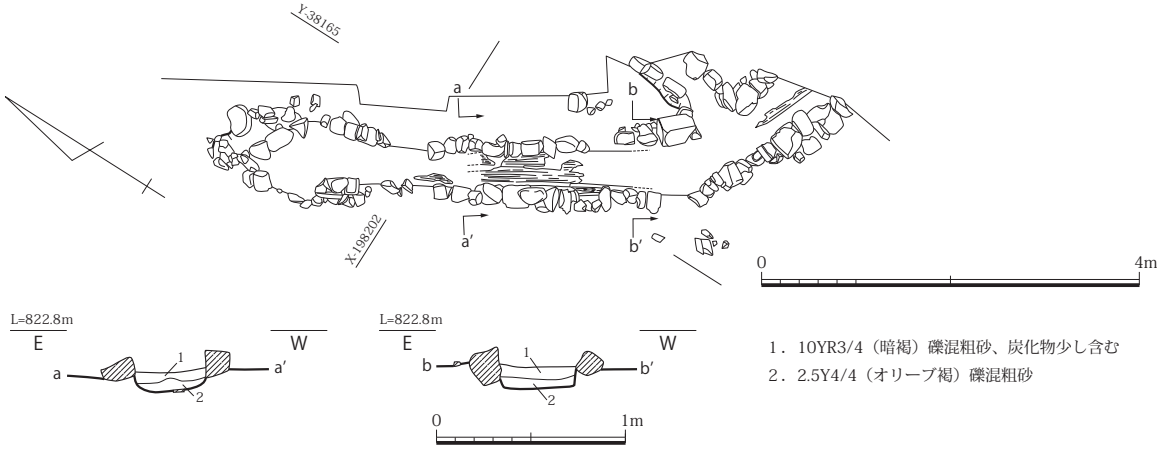


図 11　1SD01 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）

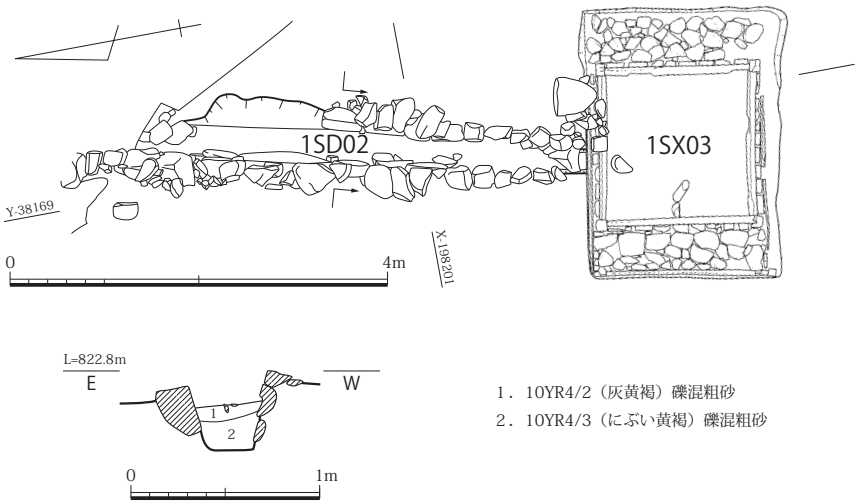


図 12　1SD02 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）

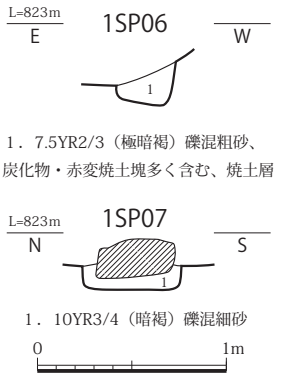


図 13　1SP06・07 土層断面図（S=1/40）

一連の遺構と考えられる。南北に直線的に存在し、北端は調査区外へと延びる。内法幅 30cm、深さ 10 ～ 20cm を測り、溝底部は北へ傾斜する。一部を除いて両岸全面に径 10 ～ 50cm の礫を二段ないし三段積みあげて護岸する。埋土は粗砂を主とし、底部傾斜を考慮すると、水溜状遺構 1SX03 から排水するための溝と考えられる。

ピット

1SP04

調査区北端に位置するピット。直径約 30cm、深さ 26cm の円形を呈する。

1SP05

調査区北端に位置するピット。長軸 38cm、短軸 30cm の楕円形を呈し、深さ 23cm を測る。

1SP06（図 13）

水溜状遺構 1SX03 北に位置するピット。直径約 35cm、深さ 12cm を測り、1SD02 の掘方を切る。埋土は礫混じりの粗砂で、柱痕等は確認できない。

1SP07（図 13）

調査区北端に位置するピット。直径約 50cm を測る円形を呈し、深さ 18cm を測る。ピット底部から約 7cm 程度浮いた位置に、直径 45 ～ 50cm の自然石を設置する。礎石と考えられるが、柱列を形成するピットを同定できなかった。

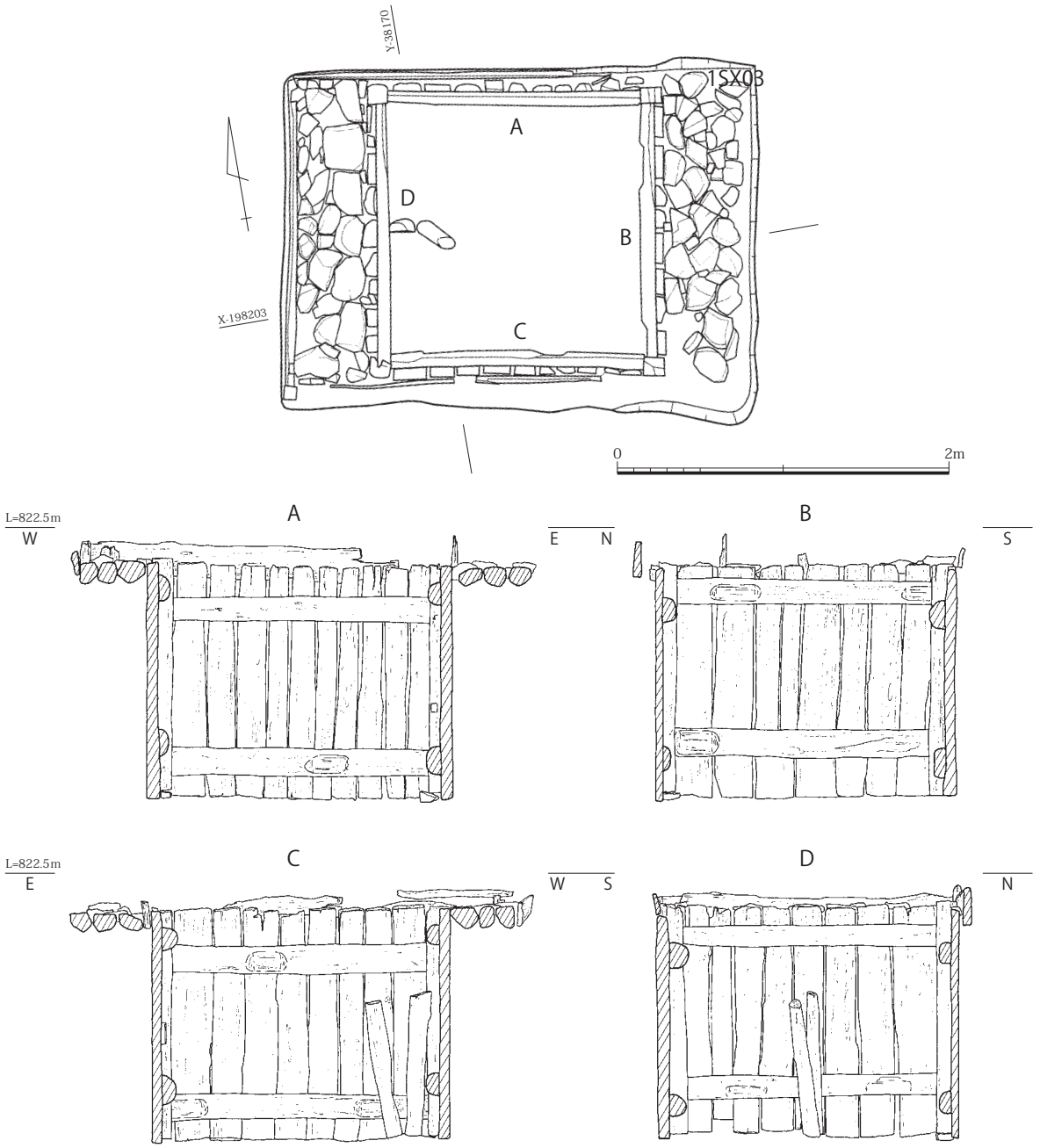


図 14　1SX03 平面・断面見通し図（S=1/40）

水溜状遺構

1SX03（図 14）

調査区中央北寄りで検出した縦板組の水溜状遺構。掘方長軸 290cm、短軸 210cm、板組内法 165cm 四方を測る。掘方掘削後、北西および南西に杭を打ち、横木を渡す。その内側に枠材を設置し、縦板を東西 8 ～ 10 枚、南北にそれぞれ 7 ～ 8 枚設置して枠を構築、同時に掘方に径 10 ～ 30cm の礫を詰め込む。最終的には幅 20cm 前後の横板材で蓋をする。下部で 1SD02 に取り付くが、接点部分は石材で蓋をする。1SX03 に溜めた水を 1SD02 に排水すると考えられる。埋土は下層が礫混じり砂、上層が焼土塊を多量に含む人為的埋土である。焼土塊は明治 22（1888）年の火災に伴うものである可能性がある。

19 世紀半ば以降に設置され、焼土塊の存在と出土遺物の様相から、最終埋没は明治 22 年頃に降ると考えられる。

（2）第 2 トレンチ検出遺構（図 15）

溝

2SD16（図 16）

調査区東半に東西に位置する溝。幅約 40cm、深さ 8cm を測り、底部はわずかに西へ傾斜する。断面形態皿形を呈し、埋土は礫混じりのシルトである。

（3）第 3 トレンチ検出遺構（図 17）

水溜状遺構

3SX01（図 18）

調査区北寄りに位置する遺構。掘方長軸 310cm、短軸 260cm 以上、木組内法長軸 205cm、短軸約 170cm 以上を測り、長方形を呈すると考えられる。掘方掘削後、隅に縦杭を設置し、横木を据える。その後掘方内に径 10 ～ 40cm の礫を充填する。横木には枘穴があり、転用材と考えられる。1SX03 と共通する構造で、水溜などの機能が推定できる。

出土遺物から 18 世紀代の遺構と考えられる。

（4）第 4 トレンチ検出遺構（図 19）

遺構面の破壊が著しく、残存状況が良くない。調査区中央付近に若干の溝と土坑が存在するが、いずれも近代のものである。

（5）第 5 トレンチ検出遺構（図 20）

土坑

5SK01（図 21・22）

調査区東端に位置する、検出長 230cm、短軸 90 ～ 110cm を測る不整形な土坑。底部レベルは起伏に富み、深さ 9 ～ 30cm と幅がある。断面形態浅い皿形を呈し、埋土は炭化物を少量含む礫混じりの細砂である。上層には大量の礫が存在し、礫の下部には板材が敷かれていた。礫の一部は 5SK03 の上面に達することから、5SK03 に後出する遺構であると考えられる。下層の溝が先行遺構であるか、掘方であるかについては明確な根拠が得られなかった。

5SK03 との関係から、19 世紀半ば以降の遺構と考えられる。

5SK02（図 21・23）

調査区中央付近に位置する、長軸 155cm、短軸 110cm、深さ約 10 ～ 20cm を測る不整形な土坑。断面形態浅い皿形を呈し、埋土は礫混じりの粗砂である。

出土遺物から 17 世紀の遺構と考えられる。

5SK03（図 21・24）

調査区中央付近に位置する木箱を埋納する土坑。掘方長軸 195cm、短軸 150cm、木枠内法長軸 130cm、短軸 55cm、深さ 25cm 前後を測る。木箱は板組で底板を持ち、内底部付近からは礫の他に石造物部材や桶、木地椀などが出土した。その配置に明確な規則性などは読み取れず、投棄された状況であった。これらの遺物を取り上げると、最下層に木箱が存在した。

出土遺物から 19 世紀以降の遺構と考えられる。

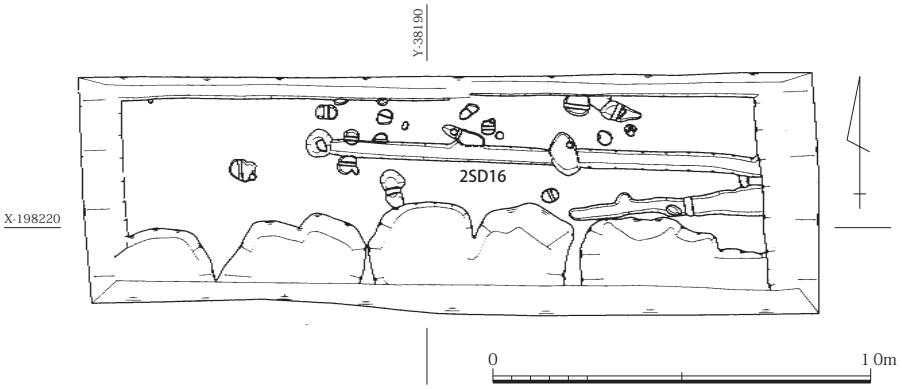
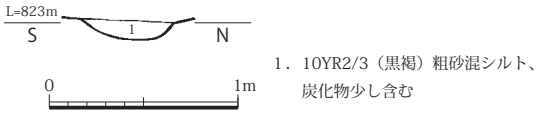


図 15　第 2 トレンチ平面図（S=1/200）



1．10YR2/3（黒褐）粗砂混シルト、
　　炭化物少し含む

図 16　2SD16 土層断面図（S=1/40）

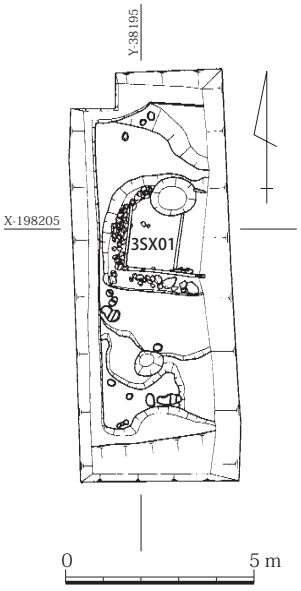


図 17　第 3 トレンチ平面図
（S=1/200）

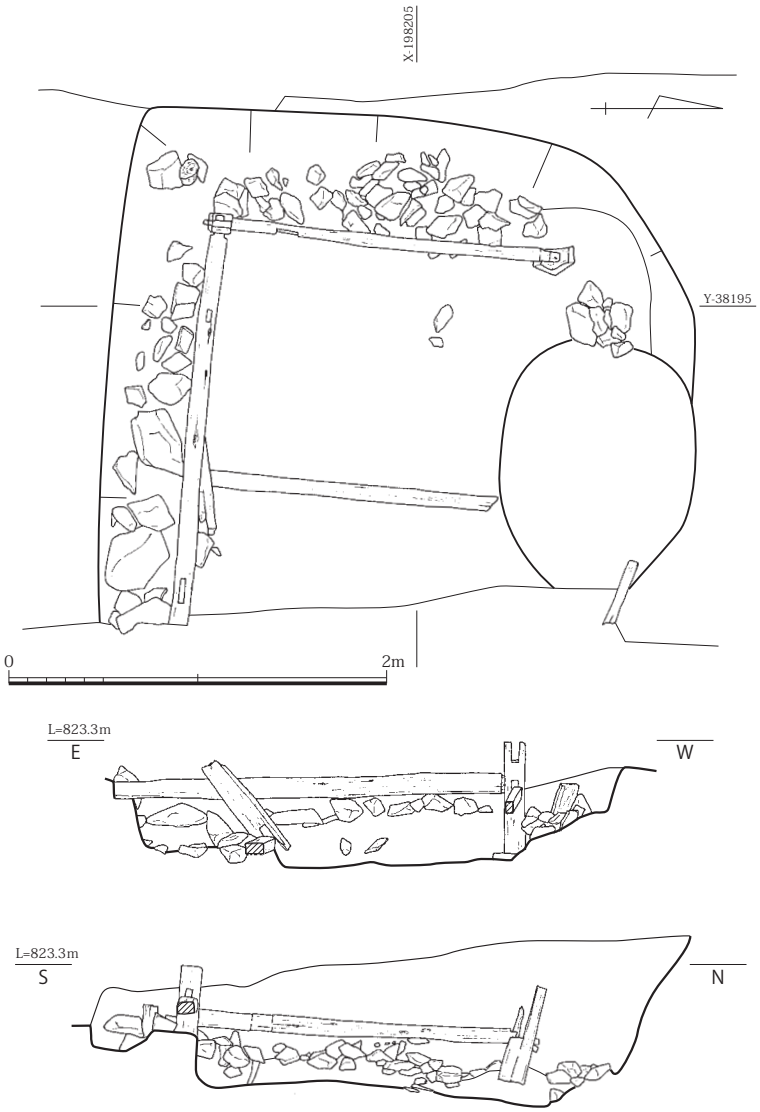


図 18　3SX01 平面図（S=1/40）

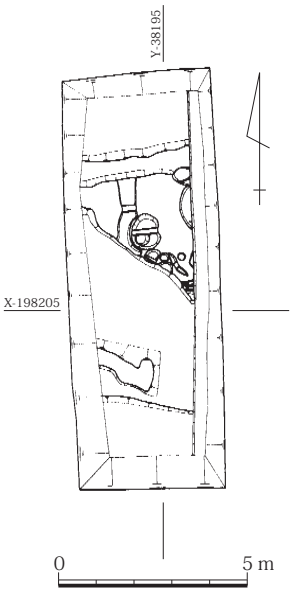


図 19　第 4 トレンチ平面図（S=1/200）

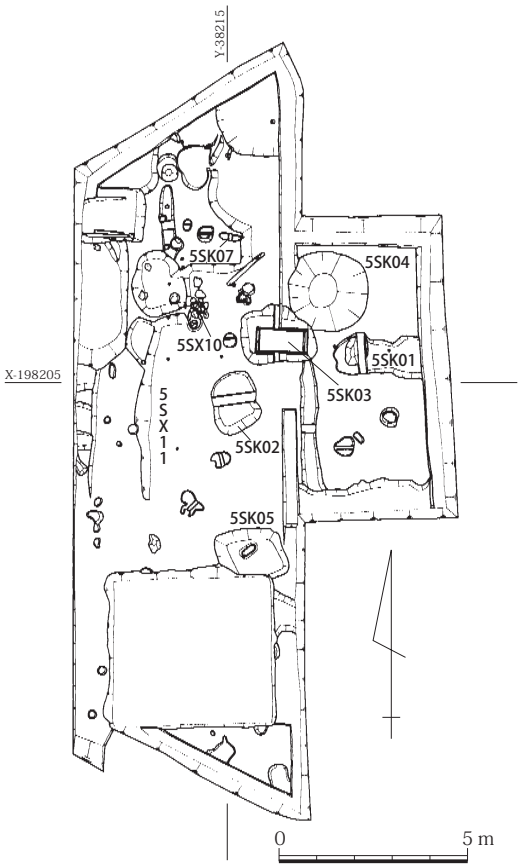


図 20　第 5 トレンチ平面図（S=1/200）

5SK04（図 21・25）

調査区中央東半に位置する土坑。5SK03 とわずかに切り合いを有するが、前後関係は明確でない。直径約 210cm、深さ約 120cm を測り、ほぼ円形を呈する。断面観察からは直径 80 ～ 100cm の井戸である可能性が高い。枠内下層には礫混じりの黒色細砂、上層には褐色の礫混じり砂が堆積する。

出土遺物から 19 世紀の遺構と考えられる。

5SK05

調査区中央東寄りに位置する、長軸 170cm、短軸 145cm、深さ約 40cm を測り、隅丸方形を呈する土坑。断面形態緩やかな箱形を呈し、埋土は炭化物と礫を含む細砂である。底部中央やや北寄りの底部からわずかに浮いた位置で、長軸 35cm、短軸 15cm の自然石が出土した。

5SK07（図 21・26）

調査区北半に位置する、長軸 60cm、短軸 18cm、深さ 2 ～ 5cm を測る不整形な土坑。断面形態浅い皿形を呈する。

その他の遺構

5SX10（石集中区）

調査区中央北寄り付近で検出した礫の集中区。径 10 ～ 40cm の自然礫が雑然と投棄されていた。礫の配置に規則性等は見られない。

5SX11（落ち込み）

調査区中央付近に広く広がる落ち込み。形状に意図は見られず、機能等は不明である。深さ 15 ～ 20cm 程度を測る。

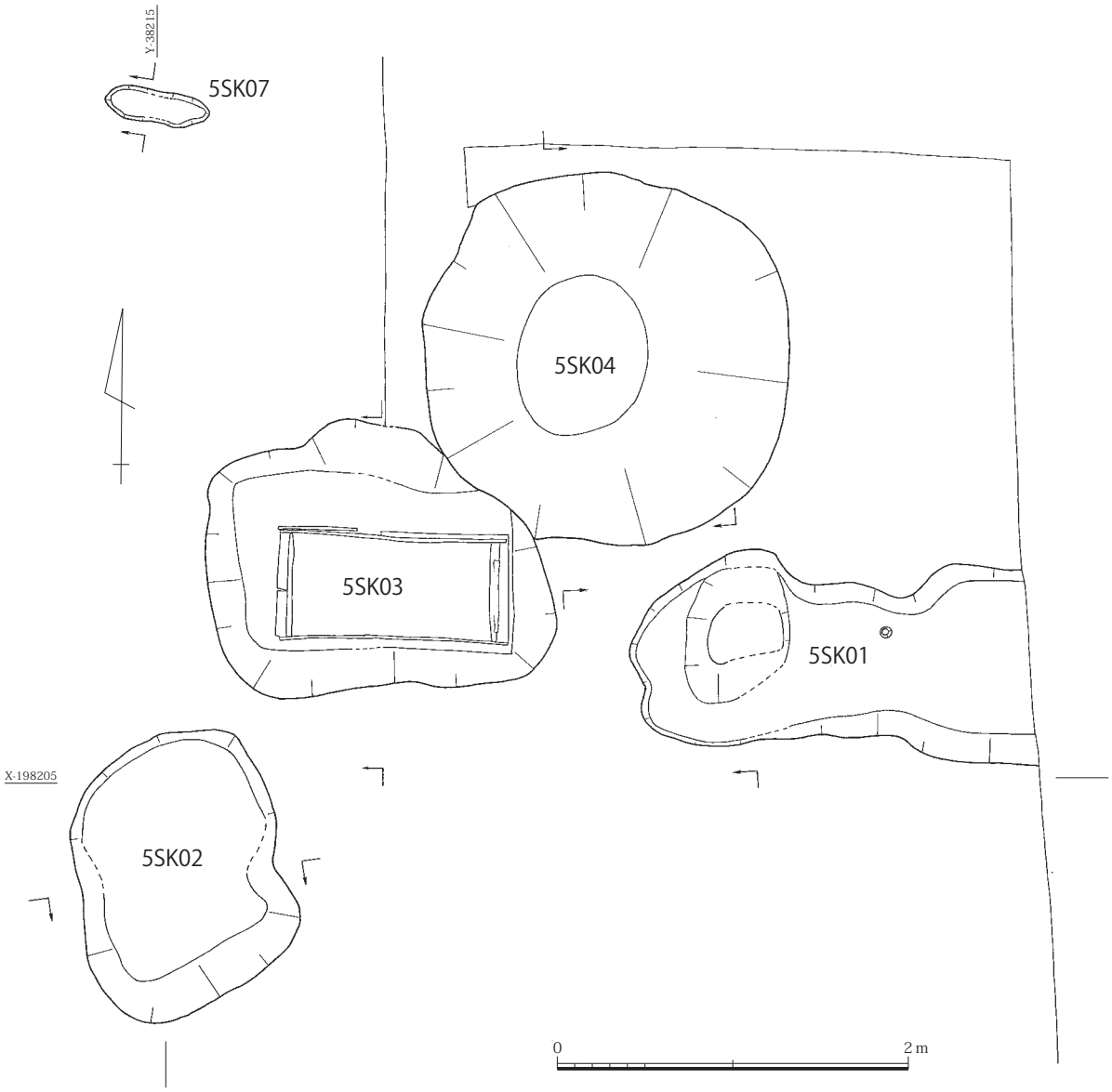


図 21　第 5 トレンチ北東部遺構平面図（S=1/40）

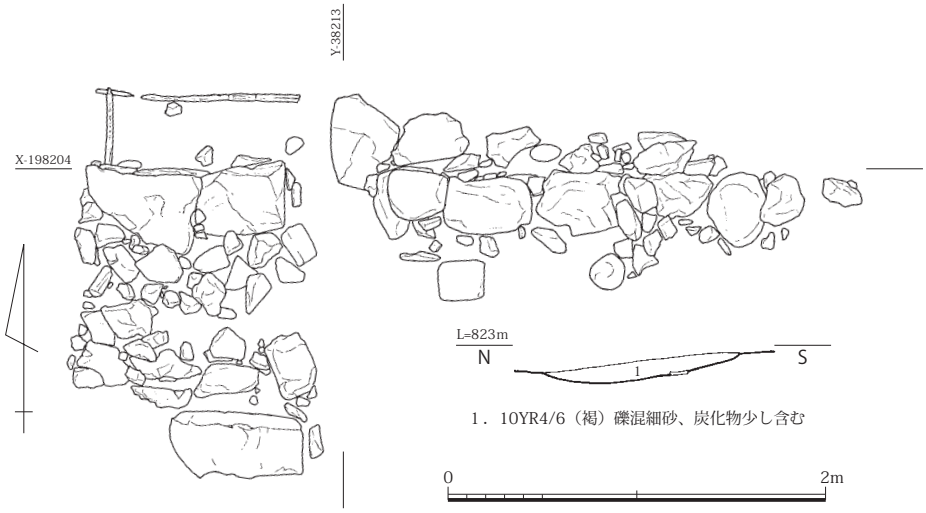


図 22　5SK01 上層礫出土状況・土層断面図（S=1/40）

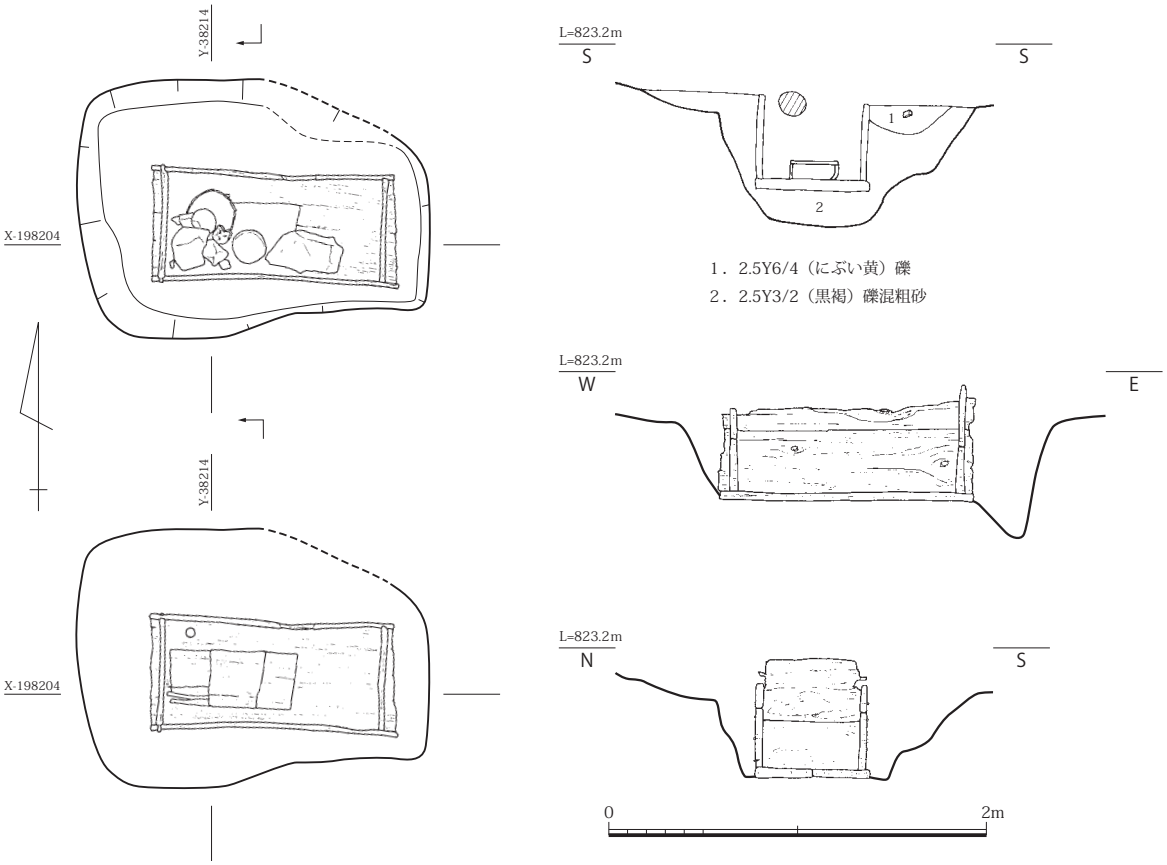


図 24　5SK03 遺物出土状況・土層断面・断面見通し図（S=1/40）

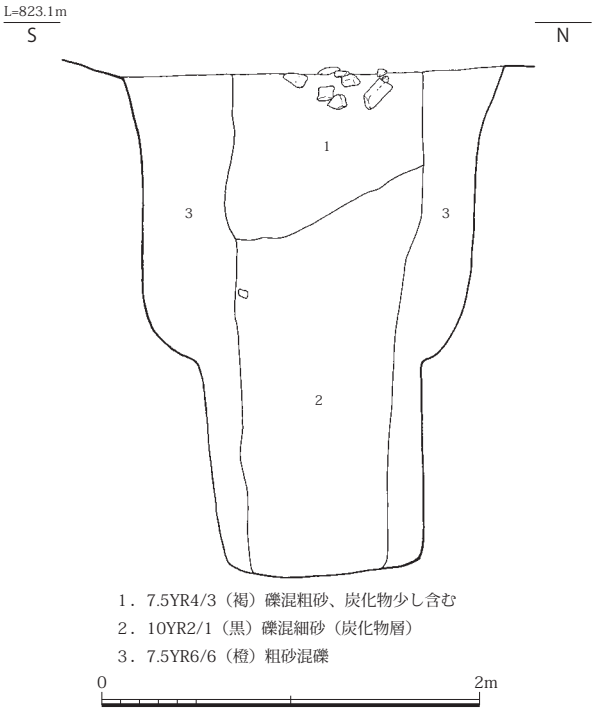


図 25　5SK04 土層断面図（S=1/40）

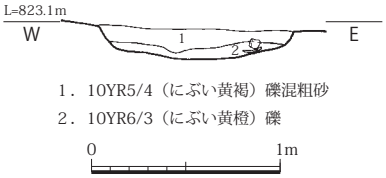


図 23　5SK02 土層断面図（S=1/40）

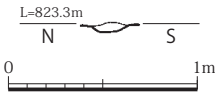


図 26　5SK07 土層断面図（S=1/40）

第３節　出土遺物

（1）第１トレンチ出土遺物

1SD01 出土遺物（図 27）

土器・陶磁器

白磁皿　1 は内外面回転ナデ調整を施し、高台部以外の全面に透明釉を施釉する。白色の精良な胎土を有し、見込み部に牡丹と獅子を陰刻する。

染付小椀　2 は白色の精良な胎土を有し、外面に松葉文を型紙摺りする。瀬戸窯のものと考えられる。

その他

煙管（3・4）　3 は銅製吸口である。銅板をかしめて製作しており、内部には羅宇が残存する。4 は銅製雁首である。銅板をかしめて製作しており、火皿は別鋳したものを接合している。

これらの遺物はいずれも 19 世紀半ば以降のものである。

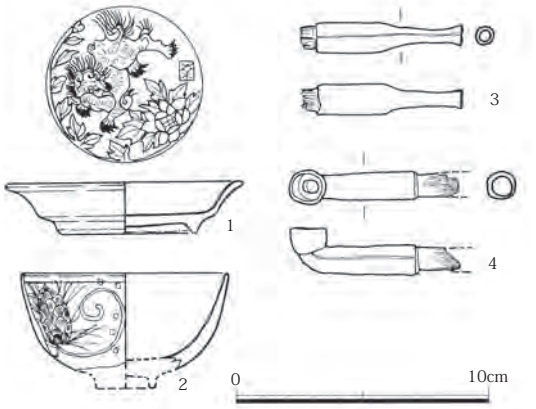


図 27　1SD01 出土遺物実測図（S=1/3）

1SX03 出土遺物（図 28 ～ 31）

土器・陶磁器

陶器燈明皿（5 ～ 7）　5 は内外面回転ナデ調整を施し、底部外面には回転糸切痕を有する。内面に細かい貫入を持つ透明釉を施釉する。京信楽系のものである。6 は台付のものである。内外面回転ナデ調整を施し、全面に細かな貫入を持つ白色釉を施釉する。7 は内外面回転ナデ調整、外面を外底面まで回転ヘラケズリを施す。内面には細かい貫入を持つ灰釉を施釉する。底部外面に墨書があるが文字種は不明である。

白磁蓋　8 はツマミ端部以外に透明釉を施釉し、口縁端部には褐色の口紅を施す。

陶器皿　9 は口縁部を波状にするもので、内外面回転ナデ調整を施す。高台はケズリ出し高台である。全面に灰釉を施釉するが接地部のみ露胎である。瀬戸窯のものである。

染付椀（10・14・15）　10 は丸椀である。薄青みを帯びた透明釉を施釉し、体部に草葉文を施す。14 は端反椀である。外面草花文、内面二重圏線を施文する。15 は端反椀である。外面草花文、口縁部内面に圏線、見込み部に一重圏線と崩れた「寿」の文字を描く。高台接地部のみ露胎である。

青磁香炉　11 は内外面回転ナデ調整を施し、高台は蛇目高台である。高台接地部を除く外面全面と口縁部内面を施釉し、外底面には砂が付着する。胎土は白色を呈し精良である。

紅皿　12 は白磁紅皿である。型づくりで内面および口縁部外面に透明釉を施釉する。

碍子　13 は白磁のピン碍子である。白色の精良な胎土を有し、螺旋部分のみ露胎である。送電線を吊り下げる懸垂碍子に使用されたと考えられる。

染付壷　16 は高台接地部と内面が露胎である。外面高台部に圏線、体部下半に草花文を施す。胎土には微細な黒色粒子を含む。

色絵小杯　17 は高台接地部のみ露胎で、胎土は白色精良である。朱線の内側を金塗りする。

色絵仏飯器　18 は破片のため文様意匠などは不明であるが、赤、薄青色、オリーブ黒の彩色を施す。脚部は中空で脚内部は露胎である。

染付ローゼット　19 はローゼット（電燈の取り付け部に使用する部品）である。内面は露胎である。胎土は白色精良で、人工呉須による草花文を施す。同様の製品は瀬戸窯のものに見られる。

染付蓋　20 は白色の精良な胎土を有し、外面に草鳥文、内面に二重圏線と崩れた寿文を描く。

染付皿（21・25・26）　21 は口縁部を波状に成形し、内外面に型紙摺りで施文する。外底面高台内は露胎である。25 は内面に草花文と唐人を人工呉須で描き、底部外面には崩れた福文、体部外面には「高」の文字を描く。高台接地部のみ露胎である。26 は口唇部に人工呉須を塗り、内面に「実□花為」「寿花市人」、体部外面に「是」と描く。高台接地部のみ露胎である。

染付鉢　22 は口縁端部上面に水平の面を持つ。口縁部内面に雷文帯、外面に草花文を描く。

染付杯　27 は波状口縁を持ち、口縁部内面に雲文、体部外面に種類不明文様を描く。体部に焼き継ぎが見られ、底部付近破断面と外底面には「に」状の継師印が見られる。

陶器壷　28 は内外面回転ナデ調整を施し、内外面褐釉を施釉する。露胎部は橙褐色を呈し、胎土は精良である。産地等は不明である。

金属製品・その他

櫛　23 はやや櫛目の粗い横櫛である。材質は滑らかな褐色のもので、鼈甲製と考えられる。

銭貨　24 は天保通寶である。楕円形を呈し、表面に「天保　通宝」裏面に「當百　（花押）」が陽鋳される。天保通寶は天保 6（1835）年に百文銭として発行され、明治に至るまで各地で鋳造された。

不明製品　29 は鉄製品である。板状の形状で、表面に「×」状の刻みを持つ。

木製品

導水管および接続材（30・32・44）　30・44 はいずれも接続材である。30 は針葉樹材に側面側から貫通孔を穿ち、これに直行する 2 面から接続孔を穿つ。貫通孔へ接続する孔は貫通孔へ取り付く直前に上方へ屈曲し、側方からスリットを挿入できるように臍穴を穿つ。複雑な水量調節が可能なように配されていると言える。これに対し 44 は貫通孔に側面側からシンプルに接続する。32 は竹製の導水管である。両小口を丁寧に面取りする。

桶　31 は 15 枚の側板を三段のタガで締めたと考えられる。タガと底板は失われている。側面に残る痕跡から、上段・中断タガは 4 本の弦、下段は 8 本の弦をそれぞれ使用したと考えられる。下部には円孔を穿ち、木製栓で閉塞する。側面に横位縦書きで「□新□□□屋□兵衛」と墨書する。

板材　33 は板目取り板材で、木口部は円弧を描くように面取りする。側面 4 カ所には木釘孔を穿つ。中央付近に節が抜けた径 1.2cm の穴があるが、これを木栓で閉塞する。表面には墨書が確認できるが文字種は不明である。

箸（34 ～ 40）　いずれも径 0.7cm 程度の棒状材で、全面をケズリで仕上げる。36 が 4 面であるほかは 5・6 面を面取りする。36 は一面が明瞭な割採り面を有し、現在の割り箸と形状が一致する。

杓文子　41 は柾目材を使用し、全面丁寧に面取りする。全面に二次的な傷がつくが、傷は特定の方向を指向しない。

杓　42 は曲物の杓である。側板には板目材、底板には柾目材を使用し、柄は失われる。側板には内外面に横方向の加工痕が残り、樹皮で密に緊縛する。底板は 4 方向から木釘を打ち込み固定し、端部に径 1cm 前後の円孔を有する。

漆器椀　43 は比較的厚い体部と小さな高台を持つ。内外面ロクロ挽きの後暗褐色及び赤色の漆を塗布する。

指物　45 は箱である。柾目材を組み合わせ、底板を 7 本の木釘で固定する。内外面黒色の漆を塗布するが、口縁部の一部に朱漆を入れる。

石製品

五輪塔（46 ～ 48）　46・47 は火輪である。いずれも砂岩製で軒下端を水平に、軒上端の両端をやや強く反らせる。上部にやや深い円形の枘を彫り、中央部に梵字「ラ」を刻む。全面タタキ仕上げだが、底面と枘内部は鑿痕を残す。48 は水輪である。砂岩製で上半を欠損し、全面タタキ仕上げだが、底面と枘周辺は鑿痕を残す。

図 28　1SX03 出土遺物実測図（1）（S=1/3）

図 29　1SX03 出土遺物実測図（2）（S=1/3）

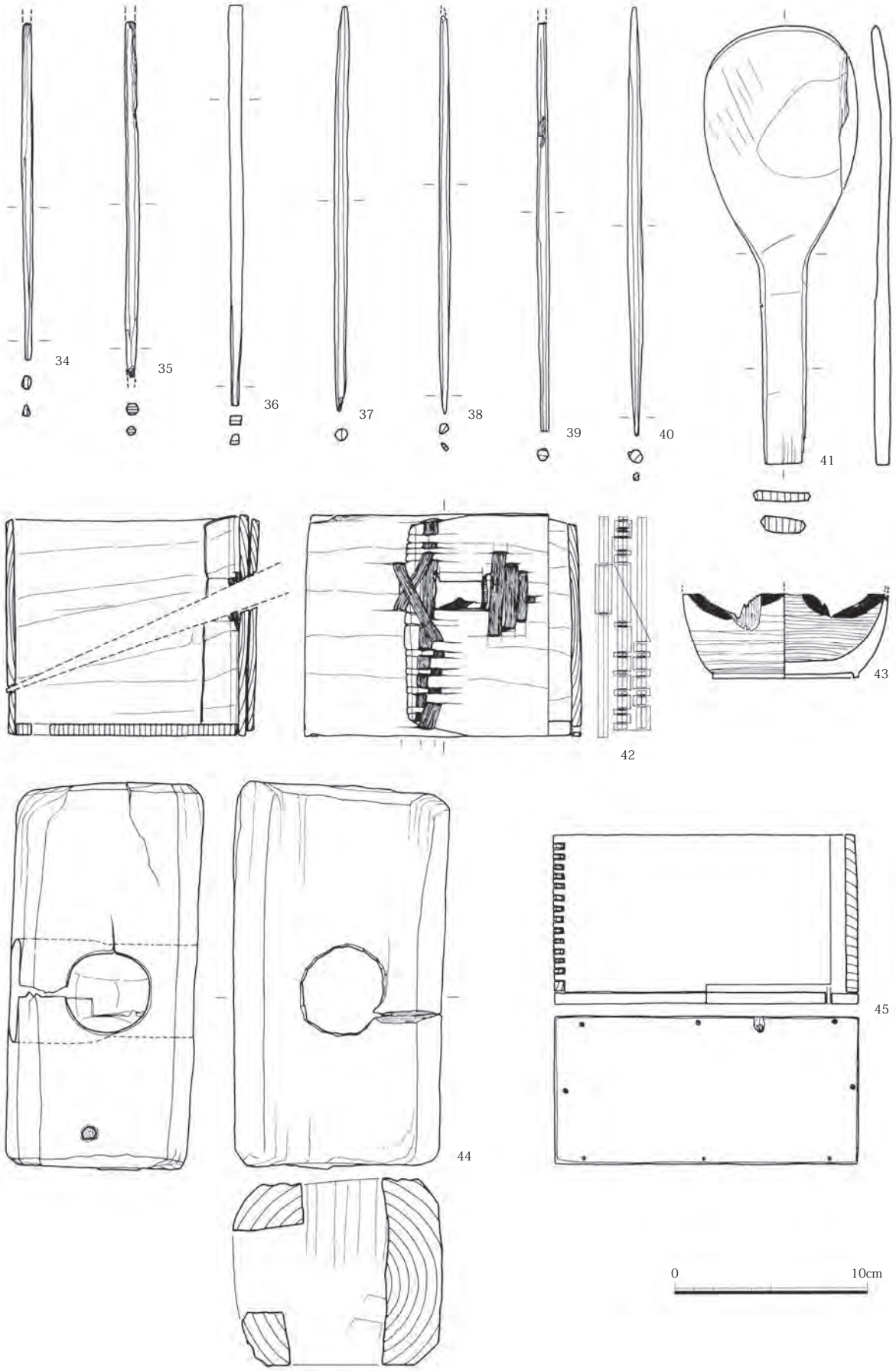


図 30　1SX03 出土遺物実測図（3）（S=1/3）

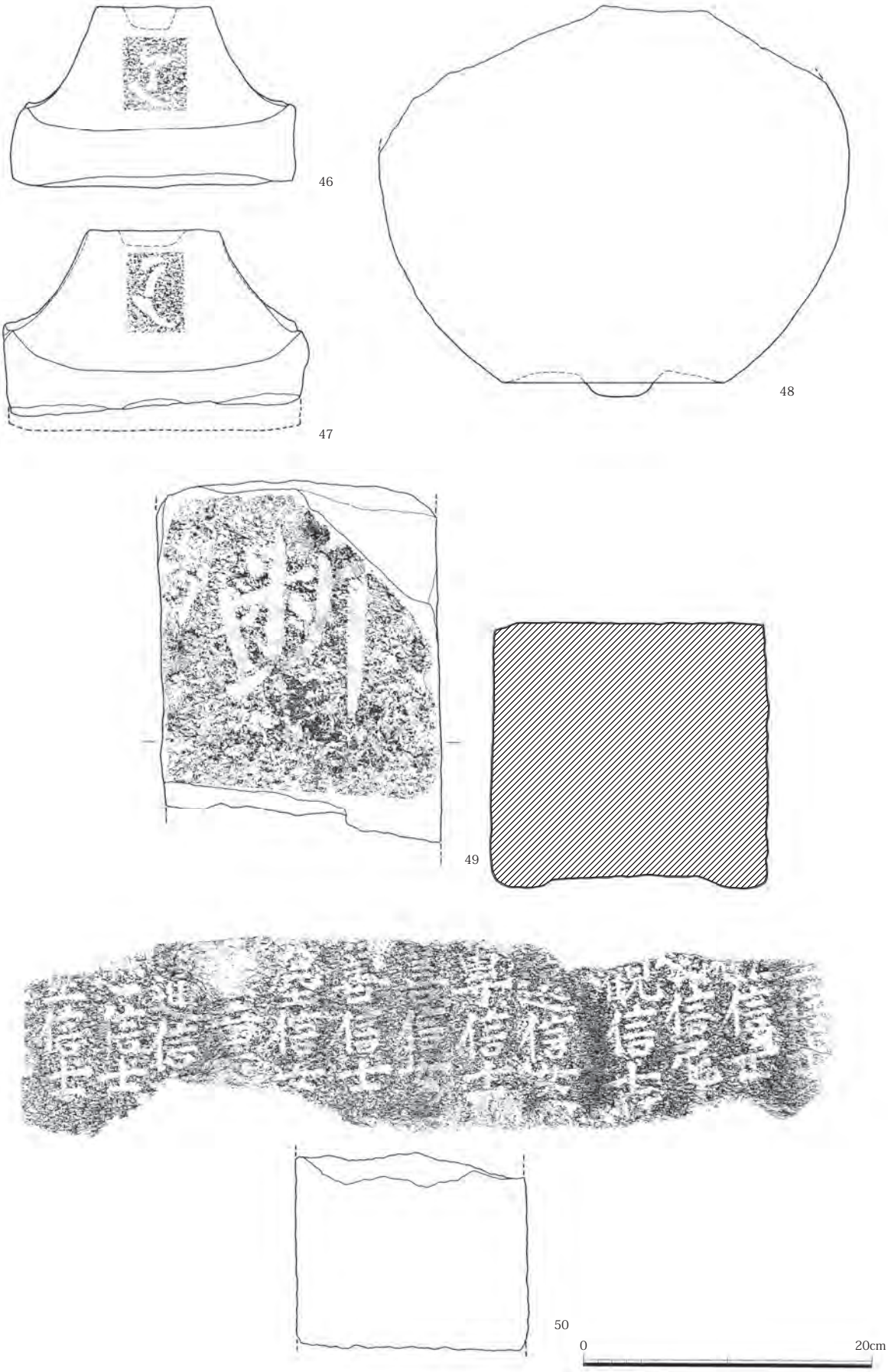


図 31　1SX03 出土遺物実測図（4）（S=1/4）

不明石製品（49･50）　49 は花崗岩製の方柱状製品である。背面に浅い刳り込みを持ち、正面には「断」と刻む。50 は花崗岩製の円柱状製品である。全面に「信士」「信女」「信尼」などの戒名を刻む。何らかの供養碑と考えられるが、全体像は不明である。

これらの遺物は 10 が 17 世紀中葉、13・19・21 が明治頃、46・47 が 16 世紀、48 が 14 世紀後半～ 15 世紀であるほかは大半が 19 世紀半ば～後半のものである。

下層包含層出土遺物（図 32）

土器・陶磁器

土師器焙烙　51 は下半部を外型で成形し、口縁部を貼りつけ、ナデ調整を施す。内面は板状工具によるナデ調整を施し、外底面には離れ砂が付着する。外面全体に煤が付着する。

陶器鉢　52 は口縁部に鍔状の突帯を持ち、内外面灰釉を施釉する。全面被熱する。

染付椀　53 は小椀である。内外面に連続した菊花文を描く。

陶器燈明皿　54 は内外面回転ナデの後、底部外面に回転ヘラケズリを施す。内面および口縁部外面に灰釉を施釉する。

これらの遺物は、53 が 18 世紀後半～ 19 世紀半ばのもの、51 が 19 世紀半ば以降のものである。

包含層出土遺物（図 33）

土器・陶磁器

陶器甕（55・56）　55 は褐釉短頸壷である。内外面回転ナデ調整を施し、口縁部外面以下にハケ掛けで褐釉を施釉する。中国産のものと考えられる。56 は内外面回転ナデ調整を施す。常滑焼大甕で、2 型式に相当し 12 世紀第 3 四半期のものである（中野 2012）。

青磁椀　57 は底部の破片である。ケズリ出し高台を有し、高台内は露胎である。見込み部には卍文を印刻する。中国龍泉窯産のもので、15 世紀代のものと考えられる。

陶器壷　58 は球胴形の体部を有する。内外面回転ナデ調整を施す。白色の下地を塗布した後、外面のみ浅黄色の釉を施釉する。

青磁花瓶（59・60）　いずれも広口の花瓶である。肩部には退化した鳥形の突起を貼りつける。内外面回転ナデ調整を施す。59 は口縁部を意図的に打ち欠く。高台接地部のみ露胎で、砂が付着する。釉薬は薄灰色で淡い発色である。

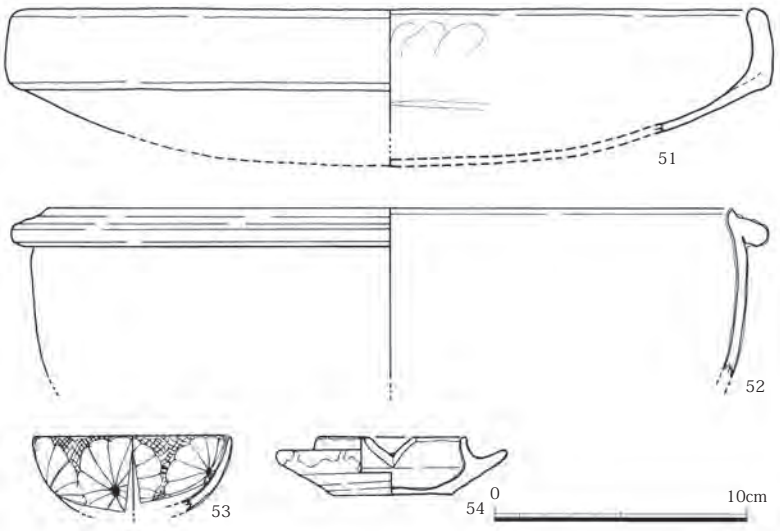


図 32　第 1 トレンチ下層包含層出土遺物実測図（S=1/3）

色絵皿　61 は高台外面に二重圏線、見込み部に草花文を描く。被熱のため色調等は不明である。高台接地部は露胎で砂が付着する。中国漳州窯産のものの可能性がある。

染付皿　62 は外面雲文、内面草花文を描き、高台接地面は露胎で砂が付着する。外底面には格子状の線刻が刻まれる。肥前産で 18 世紀代のものと考えられる。

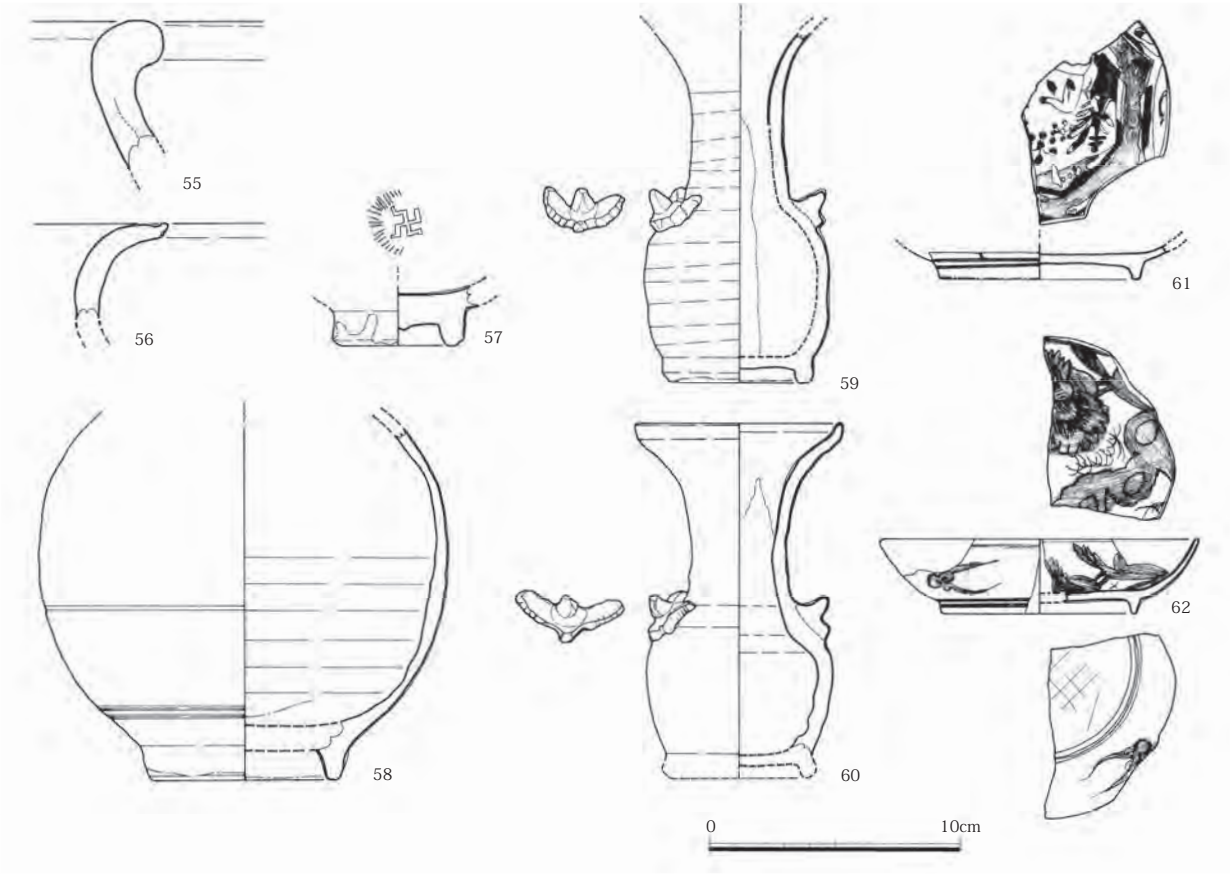


図 33　第 1 トレンチ包含層出土遺物実測図（S=1/3）

（2）第 2 トレンチ出土遺物

包含層出土遺物（図 34）

土器・陶磁器

染付皿　63 は中国製の端反り皿である。高台接地面のみ露胎でケズリ痕が見られる。内面花文、外面唐草文を描き、呉須はやや淡く発色する。16 世紀中葉に比定できる。

青磁椀　64 は龍泉窯系のものである。削り出し高台を有し、外底面釉薬を蛇の目状に掻き取る。見込み部には草花文を陰刻もしくは刻印する。

青磁皿　65 は龍泉窯系稜花皿である。口唇部に刻みを有し、内面には線刻を施す。釉は厚い。

陶器壷　66 は備前焼壷である。内外面回転ナデ調整を施し、口縁部から肩部には灰を被る。3a 期のもので、15 世紀前半のものである（乗岡 2005）。

陶器擂鉢　67 は備前焼擂鉢である。内外面回転ナデ調整を施し、口縁部には灰を被る。内面に 8 条一単位の擂目を有し、内面は著しく磨滅する。4b 期のもので、15 世紀半ばのものである。

石製品

五輪塔（68・69）　68 は水輪である。砂岩製で、最大径はやや上位に位置し、下端には枘を有する。上端は枘を持たず、浅く彫り窪める。胴部やや上位に梵字「バン」を浅く溝彫りする。15 世紀代のものと考えられる。69 は地輪である。砂岩製で、上部に枘を有する。底面には鑿痕を有し、全面被熱する。側面には梵字「ア」「沓林妙祐禅尼」と刻む。16 世紀後半頃のものと考えられる。

（3）第３トレンチ出土遺物

3SX01 出土遺物（図 35・36）

土器・陶磁器

染付杯　70 は小杯である。高台接地部のみ露胎で、体部外面に草花文を描く。

染付椀（71・72）　いずれも丸椀である。71 は体部外面に松葉文を描く。72 は丸口縁部に圏線、体部外面に草花文を描く。

陶器椀　73 は御器手椀である。見込み部３か所に目跡、高台接地部に砂が付着する。

木製品

擂粉木　74 は上端が著しく磨滅し、下半部分に著しい手擦れが見られることから擂粉木と考えられる。全面丁寧な面取りを施す。

これらの遺物のうち、土器類はいずれも肥前産のもので、18 世紀代のものである。

（4）第５トレンチ出土遺物

5SK01 出土遺物（図 37）

土器・陶磁器

染付椀（75・76）　いずれも丸椀である。75 は外面に圏線と草花文を描く。高台端部を欠損する。口縁部内面に四方襷文、体部外面に卍文などが描かれる。

陶器鍋　79 は内外面回転ナデ調整、外面下半回転ヘラケズリ調整を施し、口縁部内外面に鉄釉を施釉する。

これらの遺物は 18 世紀後半～ 19 世紀前半のものである。

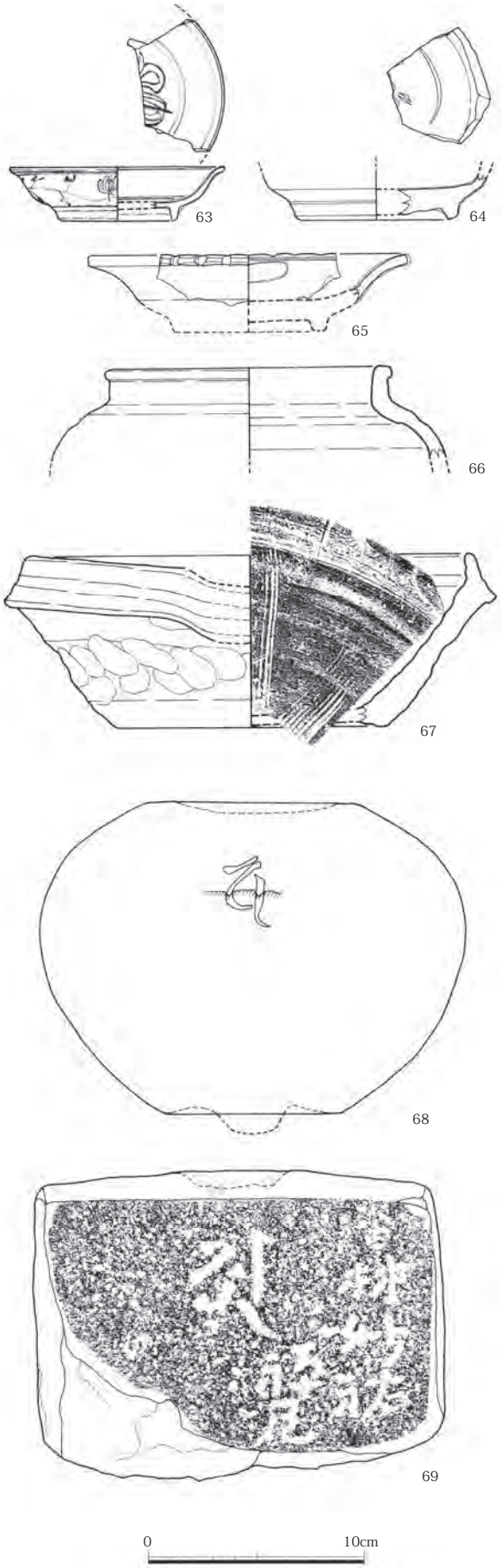


図 34　第２トレンチ包含層出土遺物（S=1/3）

5SK02 出土遺物（図 37）

土器・陶磁器

染付椀　77 は外面に圏線と雲、鳥を描く。高台内には「大明年製」の文字を描く。

土師器焙烙　78 は大和 F 類（難波 1988）の焙烙である。外型で成形し内外面ナデ調整を施す。

これらの遺物はいずれも 17 世紀代のものと考えられる。

5SK03 出土遺物（図 38 ～ 40）

土器・陶磁器

染付椀（80 ～ 92）　80 は丸椀である。高台接地部は露胎で、外面に秋草文、口縁部内面に崩れた四方襷文帯、見込み部に簡略化された松竹梅文を描く。81 ～ 85・89 ～ 92 は端反椀である。81 は高台接地部のみ露胎で、内外面型紙摺りで文様を描く。82 は高台接地部のみ露胎で、体部外面に雲文、口縁部内面に草花文帯、見込み部に「寿」の文字を描く。83 は高台接地部のみ露胎で、体部外面に鳥樹文、口縁部内面に雷文帯、見込み部に簡略化された松竹梅文を描く。84 は高台接部は露胎で、体部外面に簡略化された椿文、体部外面下半に変形松葉文、口縁部内面に四方襷文帯、見込み部に「寿」の文字を描く。85 は高台接部は露胎で、体部外面に秋草文、口縁部内面に松葉文帯、見込み部に「寿」の文字を描く。89 は高台接地部は露胎でわずかに砂が付着する。体部外面には染色体文、見込み部に記号文を人工呉須で描く。90 は高台接地部は露胎で、体部外面に雲文と菱文、口縁部内面に四方襷文帯を描く。瀬戸窯のものである。91 は高台接地部は露胎で、口縁部内外面と高台直上に圏線を描く。92 は高台接地部は露胎で、体部内外面に渦巻文（水波文）を描き、口縁端部に口サビを施す。86 は体部外面に花文を描き、見込み部は無文である。掘方出土である。87 は高台接地部のみ露胎で、体部

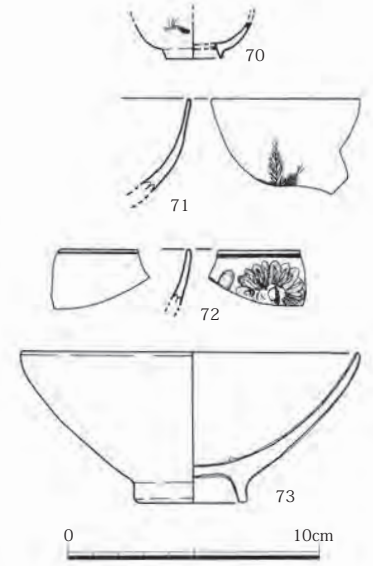


図 35　3SX01 出土遺物実測図（1）（S=1/3）

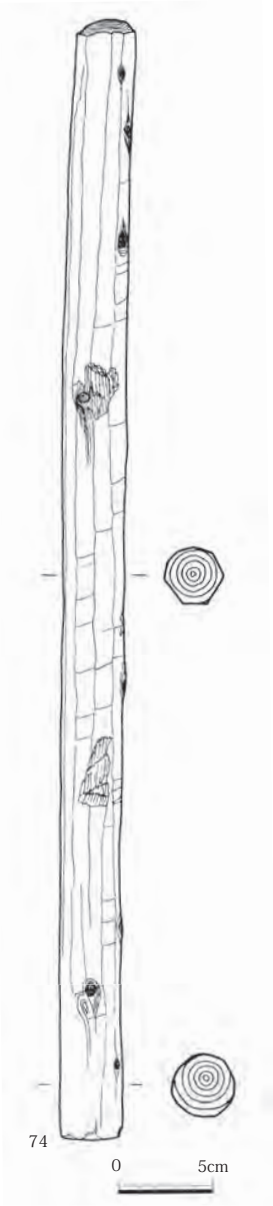


図 36　3SX01 出土遺物実測図（2）（S=1/4）

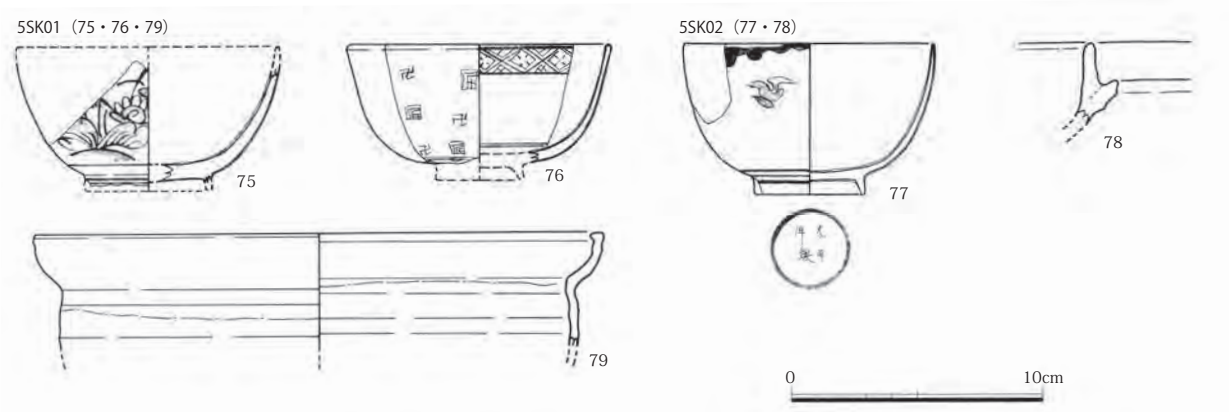


図 37　5SK01・02 出土遺物実測図（S=1/3）

外面に柳葉文かと思われる文様を描き、見込み部は無文である。88 は青磁染付色絵椀である。体部外面に緑色と褐色で紅葉を描き、見込み部は無文である。

色絵小杯（93・94・96）　93 は外面体部上半に稜線を持ち、見込み部に富士を青色釉で、松を明褐色釉で描く。高台接地部は露胎である。被熱し、体部には焼き継ぎが見られる。94 は外面体部上半に稜線を持ち、見込み部に扇と草花文を青色釉で描く。高台接地部は露胎である。被熱している。96 は外面体部上半に稜線を持ち、見込み部に花を紫色釉、葉を緑かかった褐色釉で菖蒲文を描く。体部内面には渦文帯を描き、口縁端部に口サビを施す。高台接地部は露胎である。

染付小杯　97 はわずかに外反する口縁部を持ち、体部外面に風景を描く。高台接地部は露胎で高台内に崩れた落款文を描く。

染付猪口（湯呑）（95・98・99）　95 は外面に蛸唐草文、口縁部内面には四方襷文を描く。98 は白地に型紙摺りで口縁部内面に輪宝文帯、外面に丸枠に菊と竹垣・菱と桜・丸に梅・扇面に家屋を描く。高台接地面には煤が付着する。99 は白地に型紙摺りで口縁部内面に輪宝文帯、外面に丸に花文、蓮弁を描く。高台接地部は露胎である。

染付徳利　100 は外面に楼閣を人工呉須によって描く。底部外面は露胎である。

染付蓋（101 ～ 104）　101 は段重蓋である。外面に雲龍文を描き、受け部は釉薬を剥ぎ取る。天井部外面には板状のつまみを貼りつける。102 は青磁染付である。内面に四方襷文と圏線、天井部外面に渦福文、天井部内面に五弁花文を描く。18 世紀後半のものである。103 は型紙摺りで外面に草花文､口縁部内面に輪宝文を描く。天井部内面の釉薬を蛇の目状に掻き取る。104 は外面に花文、口縁部内面に雷文帯、天井部内面には崩れた松竹梅文を、天井部外面には簡略化された「吉」の文字を描く。

染付皿（105 ～ 107）　105 は内面に草花文を描き、高台接地部に砂が付着する。掘方からの出土である。106 は内面に草花文を描き、高台接地部に砂が付着する。掘方からの出土である。107 は波状口縁を持ち、内面に花蝶文、外面に崩れた唐草文を描く。高台は蛇の目高台で、接地部の釉薬は掻き取る。

陶器壷　108 は玉縁状の口縁部を持つ無頸壷である。内外面ナデ調整を施し、内面のナデは強い。外面橙色の土師質を呈するが、透明釉もしくは褐釉の痕跡が確認できる。内面に煤が付着する。

土師器焙烙　109 は外型で成形し、底部外面には離れ砂が付着する。内面および口縁部外面ナデ調整を施す。

白磁皿　110 は外反する口縁部を持ち、内底面にはデザイン化した「韓」の文字を印刻する。底部外面には離れ砂が付着する。

陶器擂鉢（111・112）　111 は内外面回転ナデ調整を施す。内外面著しく磨滅するが、内面には 13 条一単位の擂目を密に施す。112 は内外面回転ナデ調整を施す。内外面著しく磨滅するが、内面には 10 条一単位の擂目を施す。底部外面は外縁部に圏線状の強いナデを施す以外は未調整である。

石製品

五輪塔（113 ～ 115）　113 は砂岩製五輪塔空輪破片である。縦方向に潰れ気味で、一石五輪塔の破片である可能性もある。側面に「キャ」の梵字を弱く刻む。114 は砂岩製五輪塔水輪である。枘は下面のみで、上面は浅く彫り窪める。側面に小さく「バ」の梵字を刻む。115 は砂岩製五輪塔水輪である。枘は下面のみで、上面は浅く彫り窪める。側面に小さく「バ」の梵字を刻む。

これらの遺物は 102 が 18 世紀後半、113 ～ 115 が 15 世紀と考えられるほかは 19 世紀半ば以降のものと考えられる。

5SK04 出土遺物（図 41）

陶磁器

染付椀　116 は広東椀である。外面に山水文、見込み部に波千鳥文を描く。

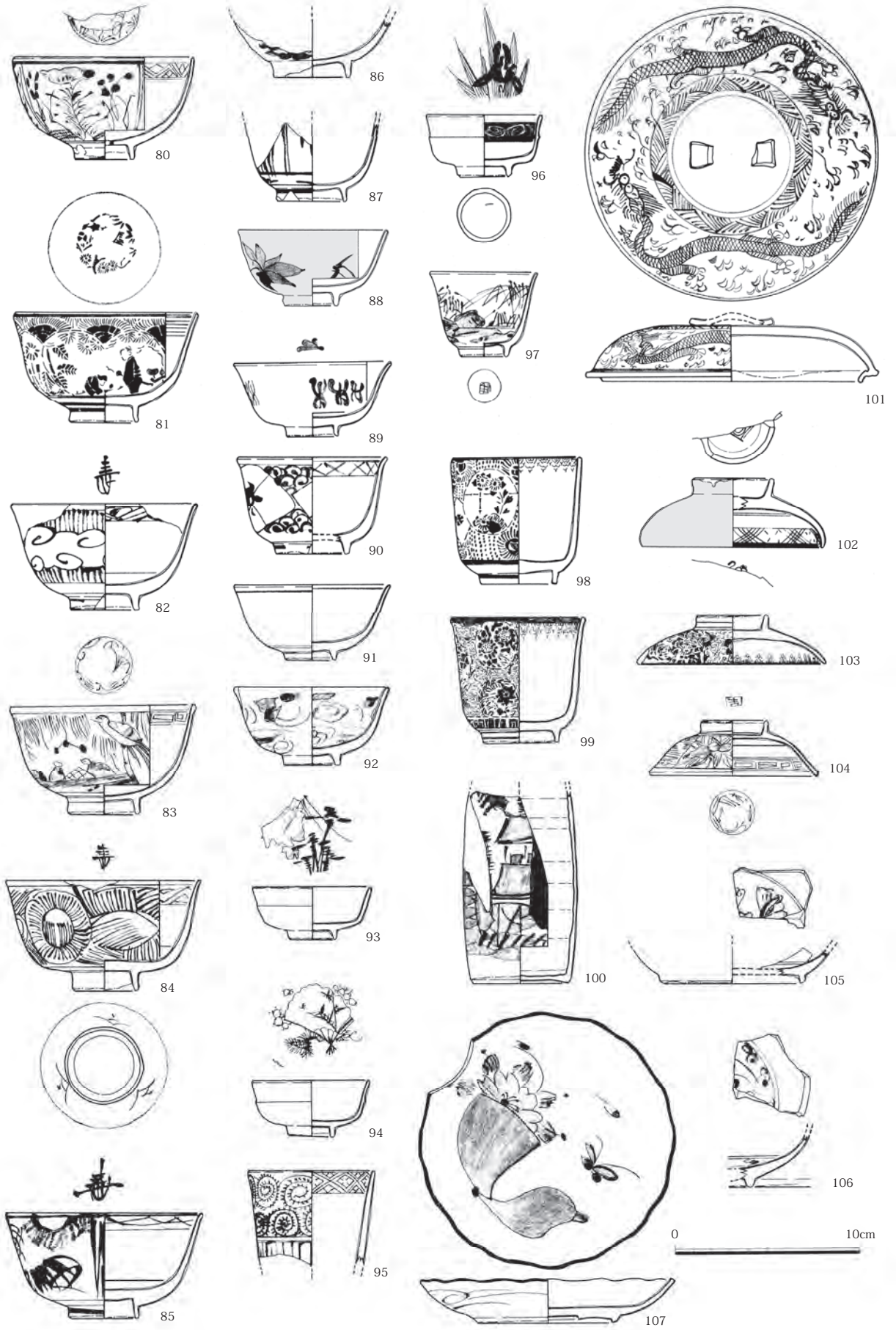


図 38　5SK03 出土遺物実測図（1）（S=1/3）

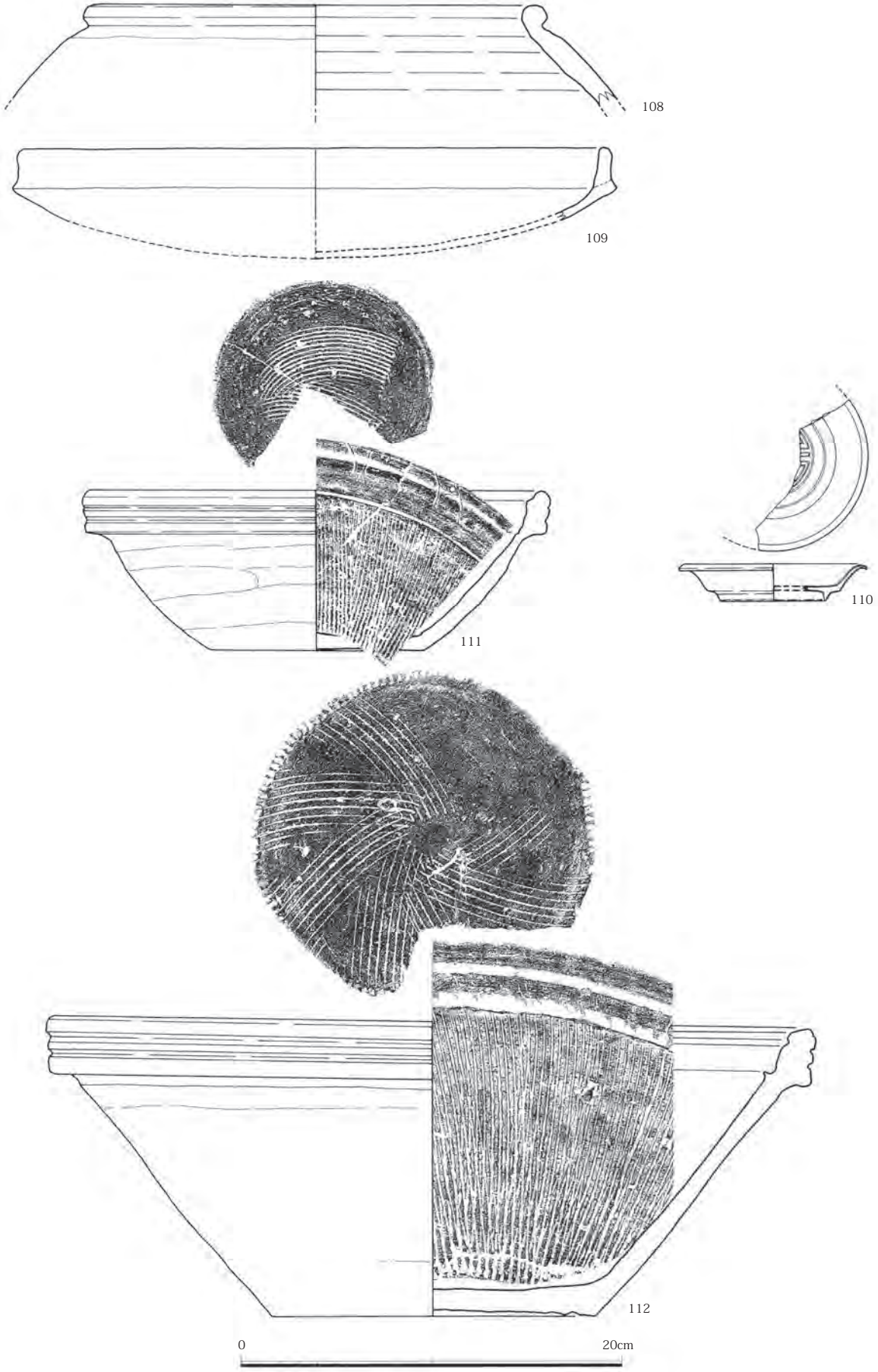


図 39　5SK03 出土遺物実測図（2）（S=1/3）

陶器椀　117 は丸椀である。内外面回転ナデ調整を施し、藁灰釉を施釉する。高台は削り出し高台である。

染付蓋　118 は外面柿文と草花文、天井部内面に鷺文を描く。ツマミ端部は露胎である。

これらの遺物は 116・118 が 18 世紀後半～ 19 世紀前半、117 は 17 世紀前半のものである。

5SK05 出土遺物（図 41）

一石五輪塔　122 は緑色片岩製の一石五輪塔である。柱状素材に浅い切り込みを入れて成形する。表面に梵字等は見られない。16 世紀後半ごろのものである

5SK07 出土遺物（図 41）

一石五輪塔　121 は緑色片岩製の一石五輪塔である。柱状素材に浅い切り込みを入れて成形する。表面に梵字等は見られない。長足の地輪部下半に鑿痕を多く残すことから、埋め込み式のものと考えられる。16 世紀代のものである。

5SX10 出土遺物（図 41）

陶器壷　120 は内外面回転ナデ調整を施し、頸部内面にはオサエ痕が見られる。口縁端部に段を持つ。東海系短頸壷と考えられる。

5SX11 出土遺物（図 41）

陶器壷　119 は内外面回転ナデ調整を施し、体部内面には当て具痕が見られる。口縁部から体部外面に褐釉を施釉するが、被熱のために泡立つ。中世前期の中国製と考えられる。

包含層出土遺物（図 41）

陶磁器

染付鉢　123 は体部外面に 3 条の隆帯を持ち、高台内は蛇の目状に成形する。内面に竹林文人画を描く。19 世紀以降のものである。

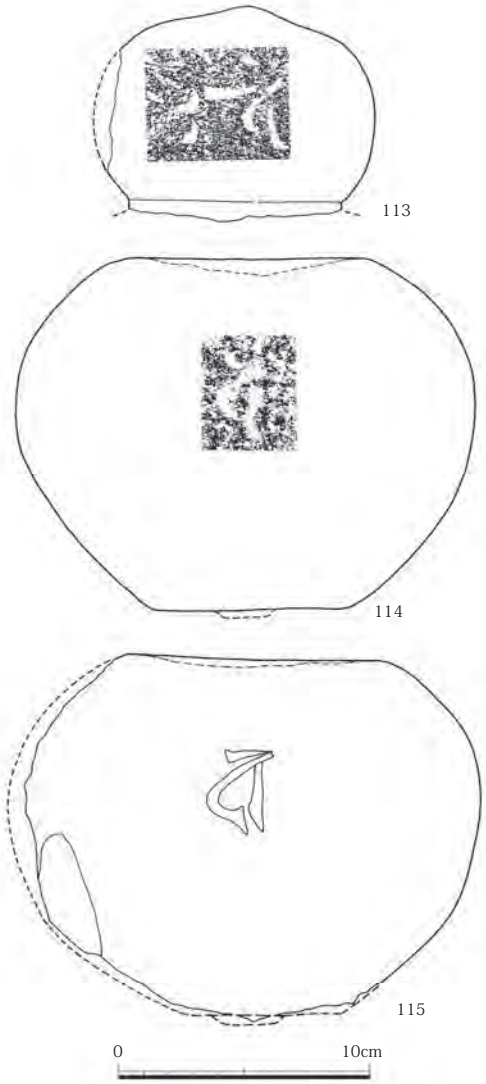


図 40　5SK03 出土遺物実測図（3）（S=1/3）

石製品

有孔滑石製品　124 は滑石素材の上下端部を鋸状工具により切り落とし、全面タタキ成形の後研磨を行う。下端は丁寧に研磨する。孔は平鑿状工具により穿孔し、孔周辺は紐ずれにより磨滅する。温石の可能性がある。

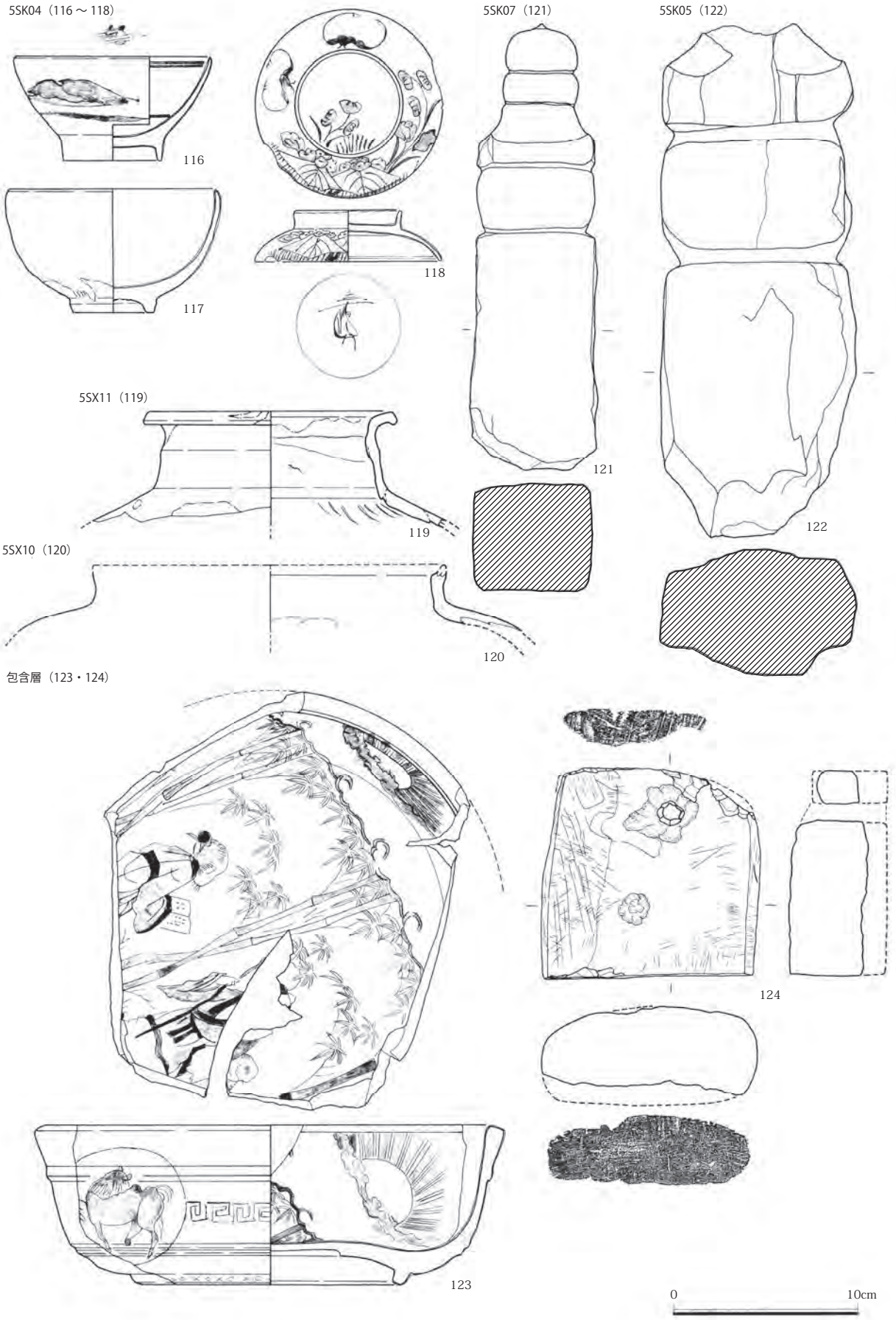


図 41　第 5 トレンチその他の遺構、包含層出土遺物実測図（S=1/3）

第 4 章　調査のまとめ

調査のまとめとして、まず遺構変遷について整理しておく。残念ながら今回の調査は、調査区が分断されたため建物等の復元ができなかった。そのため遺構変遷は困難を極め、遺構の多寡を論じるよりほかはなかった。限定された状況ではあるが、整理を試みたい。

今回の調査で検出した遺構のうち、最も古いものは第 5 トレンチで検出した 17 世紀の土坑 5SK02 である。この土坑は断面形状、埋土、出土遺物ともに特に大きな特徴はなく、何らかの施設を伴うものか判断できない。現在のところ、17 世紀以前の当地の利用状況については不明であると言わざるを得ない。

調査区の南に隣接する高野山大学の調査でも、もっとも古い遺構は 18 世紀後半のものであり（高野町教育委員会 2015）、当調査区と状況は近似する。なお、両遺跡共に近世以降の遺構や包含層から中世の遺物が出土しているが、この評価については後述する。

18 世紀になると、第 3 トレンチ 3SX01 が設置される。3SX01 は木枠を礫で固定する遺構で、水溜と考えられ、出土遺物には食器のほかに擂粉木があるなど、この遺構が何らかの生活遺構と関係するものであることを想定させる。宝永 3（1706）年『高野山壇上及び寺家絵図』に描かれる当地は、すべて院家の寺地として把握されており、発掘調査の結果を重視すると、18 世紀初頭頃に院家整備の画期がありそうである。

19 世紀には調査区周辺に広く遺構が展開している。出土遺物は食器類がほとんどで、仏具や特殊なものは出土していない。第 1 トレンチ 1SD01 からは電灯の取り付け部に設置するカバーであるローゼットが出土している。このローゼットは丁寧に草花文を染付で描き、モダンな建物の存在をうかがわせる。これらは、高野山大学創設まで周辺に存在した商家の姿をしのばせるものであろう。

ここで当地の変遷を、絵図から確認しておきたい。江戸時代前期にあたる正保 3（1646）年『御公儀上一山図』には、調査地周辺に「中生院」「吉祥院」などの諸院家がすでに成立している（図 42（出典：日野西眞定 1983『高野山古絵図集成』清栄社　以下古絵図はすべて本書からの出典である））。しかし、上の段に相当する中生院南東部分には「坊」とのみ記される小規模坊院や坊名の記載のない空閑地が残されている。これが、承応 2（1653）年『高野山絵図』になると、愛染院南側からの道路が伸び、内部の空間が「坊」となっている（図 43）。元禄 6（1693）年『高野山壇上上并寺中絵図』には「空地」や空閑地が再び出現しているなど、17 世紀代における土地利用の不安定性が看取できる（図 44）。ただし、各坊院の区画は大きくなり、整備が進んでいる。宝永 3（1706）年『高野山壇上寺家絵図』ではこの状況がさらに進み、坊院の数は淘汰され、各区画の大きさが拡大している状況が確認できる（図 45）。このように調査地周辺では特に 18 世紀になって整備が大きく進むものと考えられる。こうした状況は発掘調査の成果と整合的である。

さて、上記のように今回の調査では 17 世紀より古い遺構は見つからなかった。しかし、1SX03 出土五輪塔（46 ～ 48）や、第 1 トレンチ包含層出土陶器（55 ～ 57）、第 2 トレンチ包含層出土遺物（63 ～ 69）、第 5 トレンチ 5SK03・05 出土五輪塔（113 ～ 115）、一石五輪塔（121・122）、5SX10・11 陶器壷（119・120）などが中世の遺物に該当する。これら中世の遺物の年代を見ると、55・56 が 12 世紀、119 が中世前期、63 が 16 世紀半ば、64 ～ 67 が 15 世紀、石造物はいずれも 16 世紀のものである。同様の傾向は隣接する高野山大学校舎建設に伴う発掘調査でも確認でき、遺構は認められないものの、中世の遺物が一定量存在している。こうした状況はさらに丘陵下へも広がる。今回の調査区の道路を挟んだ反対側で行われた紀陽銀行建設工事に伴う発掘調査でも、遺構が存在しないにもかかわらず、やはり少量の中世の遺物が出土している（和歌山県文化財センター

1991)。これらの遺物は単なる混入と見るには量が多く、またローリングの痕跡も見られないなど、不自然な点が多い。小規模な堂や祠などの非常住型施設が散在していた地域に中世後期以降、院家が進出したと見ることもできよう。従来、遺構の欠如を重視し、未使用であった小田原谷が 15 世紀以降開発されてゆく姿を復元することが多かったが、今後、それに先立つ小規模な堂や祠の展開を想定してゆく必要があるだろう。

【参考文献】

高野町教育委員会 2015『金剛峯寺遺跡』

中野晴久 2012『愛知県史』別冊中世・近世常滑系　愛知県史編纂委員会

難波洋三 1988「市坂の土器作り」『京都大学埋蔵文化財研究センター紀要』Ⅶ 京都大学埋蔵文化財研究センター

野上健紀 2000「磁器の編年（色絵以外）1．椀・小杯・皿・紅皿・紅猪口」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会

乗岡　実 2005「備前」『中世窯業の諸相』全国シンポジウム「中世窯業の諸相」資料集

（財）和歌山県文化財センター 1991『金剛峯寺遺跡発掘調査概報－紀陽銀行高野山支店新築工事に伴う発掘調査－』

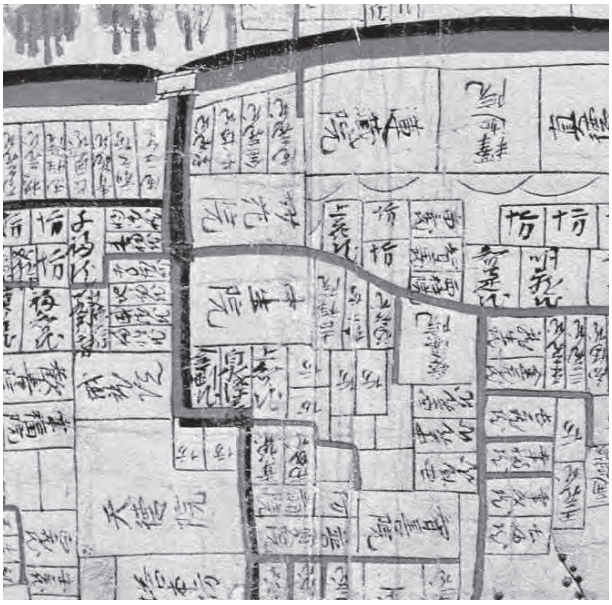


図 42 『御公儀上一山図』 正保 3（1646）年

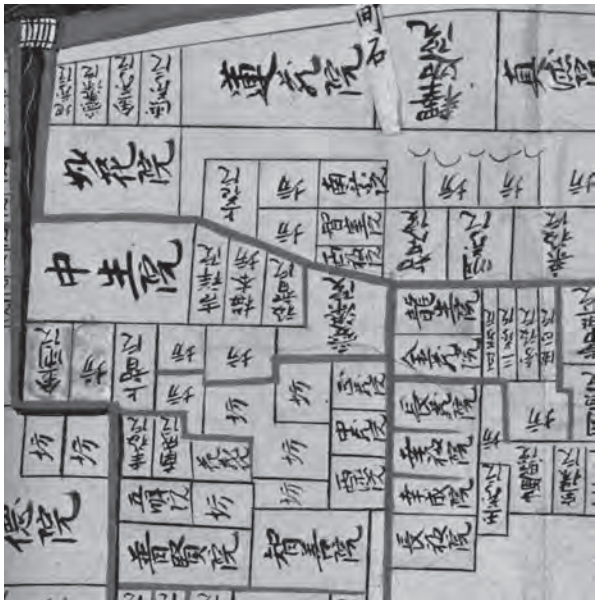


図 43 『高野山絵図』 承応 2（1653）年

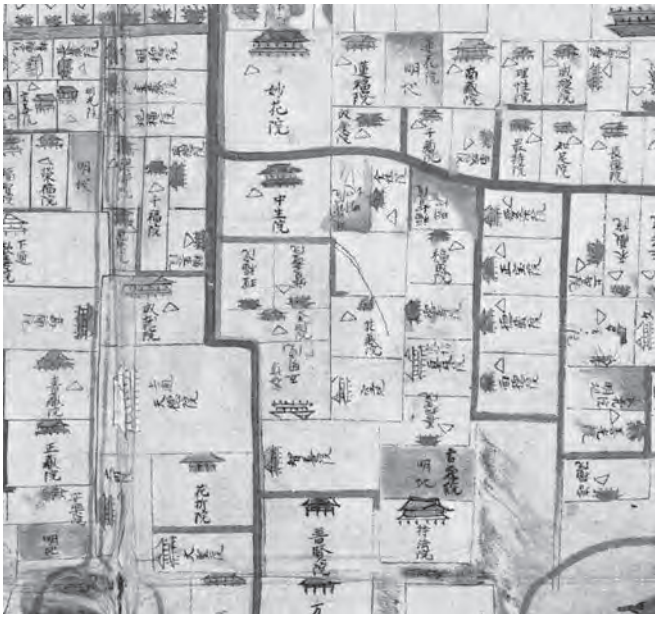


図 44 『高野山壇上上并寺中絵図』 元禄 6（1693）年

図 45 『高野山壇上寺家絵図』 宝永 3（1706）年

表２　遺構・遺物一覧（1）

トレンチ	遺構番号	層位	Ｓ－番号	種別	所見	出土遺物
1	１ＳＤ０１		イ－１	溝		国産白磁皿、国産染付椀・皿、国産陶器土瓶、平瓦、キセル・銭
		埋土1層				土師器（中世）細片、国産染付皿
	１ＳＤ０２		イ－２	溝	近代以降	国産青磁壺、国産染付椀・皿・青磁染付椀、国産陶器椀・皿・甕・炮烙、棒状石製品
	１ＳＸ０３		イ－３	水溜	中世の遺物を少量含む	土師器（中世）炮烙、国産青磁香炉・皿、国産白磁紅皿、国産染付椀・皿・鉢・徳利・色絵仏飯器・色絵小杯、国産陶器椀・皿・鉢・甕・行平鍋・擂鉢・秉燭・大甕（備前）・丸皿（瀬戸）・擂鉢（備前）、瓦質土器擂鉢、井戸枠（豊島石）・花崗岩石材・五輪塔（火輪・水輪）・硯・砥石、箸・杓文字・箱・下駄・椀・樽・曲物・ザル・導水管・継ぎ手・底 or 蓋
		焼土層				土師器（中世）炮烙・羽釜、国産陶器大甕（備前）・壺・甕、瓦質土器コンロ、木製底板、不明鉄製品、焼土
		礎石下				土師器（中世）炮烙
	１ＳＰ０４		イ－４	ピット		国産染付皿・青磁染付片、国産陶器壺・香炉・擂鉢
	１ＳＰ０５		イ－５	ピット		国産白磁細片、国産陶器甕
			イ－９			土師器（中世）皿、国産青磁皿、国産染付椀・鉢、国産陶器皿
			南側落込			国産白磁椀、国産染付椀・小杯
			包含層			土師器（中世）皿・炮烙、輸入青磁椀、国産青磁鉢、国産白磁花瓶・細片、輸入陶器甕・壺（中国・東南アジア？）、国産染付椀・皿・蓋・徳利・仏飯器・壺・鉢・色絵徳利・色絵皿・青磁染付椀、輸入染付皿（漳州）、国産陶器椀・蓋・皿・鉢・土瓶・灯明皿・行平鍋・甕（常滑）・擂鉢（備前・丹波・明石・堺）、一石五輪塔・五輪塔（水輪）・砥石、平瓦、不明銅製品、ガラス瓶
			下層包含層			土師器（中世）炮烙、国産染付椀国産染付椀・皿・小杯・青磁染付椀、国産陶器擂鉢・椀・皿・壺・甕・鉢・灯明皿・柿釉皿・徳利・瓶・壺（備前）、瓦質土器風炉、五輪塔（火輪）、平瓦・丸瓦
2			包含層			土師器（中世）皿、瓦質土器浅鉢、輸入青磁椀・皿・香炉、輸入染付皿、国産染付椀・瓶、国産陶器甕・擂鉢・擂鉢（備前）・壺（備前）・土管・壺・秉燭・タイル、平瓦、銭、ガラス（インク瓶）
3	３ＳＸ０１		イ－１	水溜		国産染付椀・小杯、国産陶器椀・鉢・擂鉢、箸・擂粉木・不明木製品、鹿角
			地山直下最下層北側			国産染付椀、国産陶器丸皿（瀬戸美濃）
			旧表土直下（包含層）		近代	国産青磁椀、国産染付椀・瓶・皿・鉢、国産陶器椀・擂鉢・甕（備前）、臼（茶臼）
			包含層			輸入青磁皿、国産青磁壺、国産染付椀・壺・皿・青磁染付椀、国産陶器椀・壺（備前）・皿・甕・鍋・擂鉢
4			包含層			国産白磁壺、国産染付椀・皿・蓋、国産陶器椀・甕
5	５ＳＫ０１		イ－１	土坑		瓦質土器鉢（朱漆付）、国産染付椀、五輪塔（地輪 16C 石敷転用品）
		３層				瓦質土器鉢、国産青磁鉢、国産染付椀、国産陶器鍋、緑泥片岩片
	５ＳＫ０２		イ－２	土坑		土師器（中世）炮烙、国産染付椀
	５ＳＫ０３		イ－３	土坑		瓦質土器鉢、国産染付椀・蓋・湯呑・徳利・小杯・皿・色絵小杯、国産陶器甕・鉢・擂鉢・甕（備前）、輸入陶器甕、五輪塔（水輪）、平瓦・丸瓦・道具瓦、樽
		掘方内				土師器（中世）炮烙、輸入染付椀・皿・皿（漳州）、国産陶器皿・擂鉢（備前）
	５ＳＫ０４		イ－４	土坑		国産染付椀・蓋
	５ＳＫ０５		イ－５	土坑		土師器（中世）壺、一石五輪塔
	５ＳＫ０７		イ－７	土坑		国産陶器椀（唐津）、一石五輪塔
			イ 20			国産陶器擂鉢（備前）、鉄釘
			イ 21			礎石

表 3　遺構・遺物一覧（2）

トレンチ	遺構番号	層位	S －番号	種別	所見	出土遺物
5			木枠掘方埋土内下層			土師器（中世）皿
			西側落込		近世～近代	瓦質土器壺・擂鉢（大和）・深鉢・方形浅鉢、国産白磁椀・皿・香炉、国産青磁香炉、国産染付椀・皿・小杯・猪口・青磁染付椀、国産陶器壺・椀・皿・火鉢・土瓶・天目椀、炉壁 or 壁土、砥石・一石五輪塔、不明木製品、スラグ、ガラス
			東側落込			土師器（中世）炮烙・深鉢、瓦質土器釜（茶釜）、国産染付椀・皿・瓶・鉢、輸入陶器緑釉壺、国産陶器擂鉢・蓋・土瓶・椀・擂鉢（丹波）・小皿（瀬戸）、椀型滓・炉壁・鉄釘
			石集中			国産陶器短頸壺（東海系）、五輪塔（空風輪）
			包含層			瓦質土器コンロ、国産青磁鉢・壺、輸入青磁椀、国産染付瓶・椀・皿・蓋、国産陶器土瓶・鉢・壺・灯明皿・甕・皿・擂鉢・鍋・壺（備前・信楽）・擂鉢（丹波）、滑石不明品・砥石・砂岩製五輪塔基礎、不明木製品、不明鉄製品

表４　実測遺物一覧（1）

挿図 写真図版	出土遺構 層位	種別 器種	口径－器高－底径(cm) 残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
図27－1 図版8	第1トレンチ 1SD01	白磁 皿	9.6 － 2.1 － 5.4 80%	密	良 白N9/0	
図27－2	第1トレンチ 1SD01	磁器(染付) 小椀	(8.3) － (3.9) － * 30%	密	良 白N9/0	
図27－3 図版8	第1トレンチ 1SD01	銅製品 煙管(吸口部)	(6.5) － 1.8 － 1.2			
図27－4 図版8	第1トレンチ 1SD01	銅製品 煙管(雁首)	(6.8) － 1.9 － 1.1			
図28－5 図版8	第1トレンチ 1SX03	陶器 灯明皿	(6.0) － 1.1 － (3.0) 70%	密	良 淡黄2.5Y8/3	
図28－6	第1トレンチ 1SX03	陶器 台付灯明皿	(8.3) － 5.7 － * 40%	密	良 灰白2.5Y8/1	
図28－7	第1トレンチ 1SX03	陶器 灯明皿	(11.8) － 2.5 － (5.1) 10%	密	良 灰白8/0	墨書あり
図28－8	第1トレンチ 1SX03	白磁 蓋	9.1 － 2.9 － 3.2 70%		良 白9/0	
図28－9 図版8	第1トレンチ 1SX03	陶器 皿	7.4 － 1.8 － 3.5 80%	密	良 灰白2.5Y8/1	瀬戸窯
図28－10	第1トレンチ 1SX03	磁器(染付) 丸椀	(8.9) － (4.0) － * 30%	密	良 灰白N8/0	
図28－11 図版9	第1トレンチ 1SX03	青磁 香炉	12.0 － 7.5 － 7.8 90%	密	良 灰白N8/0	
図28－12	第1トレンチ 1SX03	白磁 紅皿	4.4 － 1.5 － 1.5 100%	密	良 白9/0	
図28－13	第1トレンチ 1SX03	白磁 碍子	(8.9) － 4.0 － (4.0) 50%	密	良 白N9/0	
図28－14	第1トレンチ 1SX03	磁器(染付) 端反椀	* － (3.9) － (4.0) 10%	密	良 白9/0	
図28－15 図版9	第1トレンチ 1SX03	磁器(染付) 端反椀	10.4 － 5.7 － 4.0 70%	密	良 白9/0	
図28－16	第1トレンチ 1SX03	磁器(染付) 壷	* － (6.0) － (9.6) 10%	密	良 白9/0	
図28－17	第1トレンチ 1SX03	磁器(色絵) 小杯	(7.3) － 2.8 － (3.1) 10%	密	良 白9/0	
図28－18 図版9	第1トレンチ 1SX03	磁器(色絵) 仏飯器	(5.8) － 6.3 － (4.9) 60%	密	良 灰白7.5Y8/1	
図28－19	第1トレンチ 1SX03	磁器(染付) ローゼット	(6.5) － (3.2) － * 20%	密	良 白N9/0	
図28－20 図版9	第1トレンチ 1SX03	磁器(染付) 蓋	9.3 － 2.4 － 3.6 60%	密	良 白9/0	
図28－21	第1トレンチ 1SX03	磁器(染付) 皿	(12.6) － 3.1 － (8.0) 30%	密	良 白N9/0	
図28－22	第1トレンチ 1SX03	磁器(染付) 鉢	(20.4) － (5.6) － * 口縁部細片	密	良 白9/0	
図28－23 図版9	第1トレンチ 1SX03	鼈甲 櫛	(4.6) － (3.6) － 0.4 30%			
図28－24 図版9	第1トレンチ 1SX03	銅製品 銭貨	4.9 － 3.3 － 0.5 － 12.7g 100%			天保通寶
図28－25	第1トレンチ 1SX03	磁器(染付) 皿	(10.9) － 2.1 － (6.2) 30%	密	良 白N9/0	
図28－26 図版10	第1トレンチ 1SX03	磁器(染付) 皿	(10.7) － 2.1 － (6.0) 20%	密	良 白9/0	
図28－27	第1トレンチ 1SX03	磁器(染付) 杯	(9.1) － 6.3 － (5.1) 40%	密	良 白N9/0	
図28－28 図版10	第1トレンチ 1SX03	陶器 壷	* － (8.1) － 9.9 10%	良 ～4㎜長石	良 橙2.5Y7/8	
図28－29 図版10	第1トレンチ 1SX03	鉄製品 不明品	(14.7) － 2.0 － 1.0 － 127.7g 50%			
図29－30 図版10	第1トレンチ 1SX03	木製品 接続材	18.2 － 13.1 － 8.6 95%			
図29－31	第1トレンチ 1SX03	木製品 桶	34.3 － 30.3 － 29.7 80%			墨書あり
図29－32	第1トレンチ 1SX03	竹製品 導水管	59.2 － 5.4 － 4.8 100%			
図29－33	第1トレンチ 1SX03	木製品 板材	28.9 － 8.2 － 1.7 25%			墨書あり
図30－34	第1トレンチ 1SX03	木製品 箸	(17.7) － 0.6 － 0.7 70%			
図30－35	第1トレンチ 1SX03	木製品 箸	(18.6) － 0.7 － 0.7 80%			
図30－36	第1トレンチ 1SX03	木製品 箸	20.9 － 0.7 － 0.6 100%			
図30－37	第1トレンチ 1SX03	木製品 箸	(21.2) － 0.9 － 0.7 90%			
図30－38	第1トレンチ 1SX03	木製品 箸	(20.8) － 0.7 － 0.6 90%			
図30－39	第1トレンチ 1SX03	木製品 箸	(21.4) － 0.7 － 0.7 80%			
図30－40	第1トレンチ 1SX03	木製品 箸	22.4 － 0.8 － 0.7 100%			
図30－41	第1トレンチ 1SX03	木製品 杓文子	22.9 － (7.6) － 0.9 90%			
図30－42 図版10	第1トレンチ 1SX03	木製品 杓	14.0 － 11.6 － 14.5 100%			柄部は欠損

表５　実測遺物一覧（2）

挿図 写真図版	出土遺構 層位	種別 器種	口径－器高－底径(cm) 残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
図30－43	第1トレンチ 1SX03	木製品(漆器) 椀	* －（4.4）－ 7.6 80%		暗褐10YR3/3(漆)	
図30－44 図版11	第1トレンチ 1SX03	木製品 接続材	20.4 － 11.4 － 9.8 100%			
図30－45	第1トレンチ 1SX03	木製品(漆器) 指物箱	15.9 － 8.8 － 15.9 100%		黒10YR1.7/1(漆)	
図31－46	第1トレンチ 1SX03	石製品 五輪塔(火輪)	* －（12.7）－ 19.4	砂岩		
図31－47	第1トレンチ 1SX03	石製品 五輪塔(火輪)	* －（13.0）－ 21.0	砂岩		
図31－48	第1トレンチ 1SX03	石製品 五輪塔(水輪)	* － 27.0 － 32.6	砂岩		
図31－49	第1トレンチ 1SX03	石製品 方柱状製品	* －（25.0）－（19.4）	花崗岩		
図31－50 図版11	第1トレンチ 1SX03	石製品 円柱状製品	* －（13.5）－ 16.0	花崗岩		
図32－51	第1トレンチ 下層包含層	土師器 焙烙	（30.2）－（5.0）－ * 10%	良 ～3㎜石英、長石、クサリ礫、雲母	良 橙5YR7/6	煤付着
図32－52	第1トレンチ 下層包含層	陶器 鉢	（27.8）－（6.8）－ * 10%	密	良 灰白N7/0	
図32－53	第1トレンチ 下層包含層	磁器(染付) 小椀	（8.0）－（3.1）－ * 10%	密	良 白N9/0	
図32－54 図版11	第1トレンチ 下層包含層	陶器 灯明皿	9.3 － 2.4 － 4.8 100%	密	良 灰オリーブ7.5Y6/2(釉)	
図33－55	第1トレンチ 包含層	陶器 甕	* －（4.9）－ * 口縁部片	密	良 にぶい赤褐2.5YR5/1	中国
図33－56	第1トレンチ 包含層	陶器 甕	* －（3.8）－ * 口縁部片	密	良 灰N6/0	常滑焼
図33－57	第1トレンチ 包含層	青磁 椀	* －（2.4）－（5.3） 底部片	密 長石	良 灰白N7/0	龍泉窯系
図33－58 図版11	第1トレンチ 包含層	陶器 壷	* －（14.1）－（7.7） 10%	密	良 褐灰7.5YR4/1	
図33－59 図版12	第1トレンチ 包含層	青磁 花瓶	* －（14.0）－（6.1） 80%	密	良 灰白N8/0	
図33－60 図版12	第1トレンチ 包含層	青磁 花瓶	（8.4）－（13.5）－ * 30%	密	良 白N9/0	
図33－61 図版12	第1トレンチ 包含層	磁器(色絵) 皿	* －（1.4）－（8.1） 10%	密	良 白N9/0	漳洲窯？
図33－62 図版12	第1トレンチ 包含層	磁器(染付) 皿	（12.8）－ 3.0 －（7.9） 10%	密	良 白N9/0	
図34－63 図版13	第2トレンチ 包含層	磁器(染付) 皿	（10.0）－ 2.5 －（5.6） 10%	密	良 白N9/0	中国
図34－64	第2トレンチ 包含層	青磁 椀	* －（2.2）－（7.6） 10%	密	良 灰N6/0	龍泉窯系
図34－65	第2トレンチ 包含層	青磁 皿	（15.0）－（2.4）－ * 10%	密	良 灰白N7/0	龍泉窯系
図34－66 図版13	第2トレンチ 包含層	陶器 壷	（13.4）－（4.3）－ * 45%	密	良 にぶい赤褐7.5YR5/3	備前焼
図34－67 図版13	第2トレンチ 包含層	陶器 擂鉢	（21.0）－ 8.0 －（12.7） 10%	密 ～5㎜長石、石英	良 赤褐10YR5/3	備前焼
図34－68	第2トレンチ 包含層	石製品 五輪塔(水輪)	* －（14.5）－ 19.8	砂岩		
図34－69	第2トレンチ 包含層	石製品 五輪塔(地輪)	* － 14.4 － 19.2	砂岩		
図35－70	第3トレンチ 3SX01	磁器(染付) 小杯	* －（1.4）－（2.2） 底部片	密	良 白9/0	
図35－71	第3トレンチ 3SX01	磁器(染付) 丸椀	* －（3.8）－ * 口縁部片	密	良 白9/0	
図35－72	第3トレンチ 3SX01	磁器(染付) 丸椀	* －（2.2）－ * 口縁部片	密	良 白9/0	
図35－73	第3トレンチ 3SX01	陶器 椀	13.6 － 6.0 － 4.4 25%	密	並 灰白5Y7/2	
図36－74	第3トレンチ 3SX01	木製品 擂粉木	59.4 － 4.2 － 3.3 100%			
図37－75	第5トレンチ 5SK01	磁器(染付) 丸椀	* －（4.8）－ * 10%	密	良 白N8/0	
図37－76	第5トレンチ 5SK01	磁器(染付) 丸椀	（10.6）* －（4.8）－ * 10%	密	良 白N9/0	
図37－77	第5トレンチ 5SK02	磁器(染付) 椀	（10.2）－ 6.1 －（4.4） 30%	密	良 白N9/0	
図37－78	第5トレンチ 5SK02	土師器 焙烙	* －（3.3）－ * 口縁部片	並 ～3㎜石英、長石、クサリ礫、雲母	良 にぶい黄橙10YR7/3	
図37－79	第5トレンチ 5SK01	陶器 鍋	（22.8）－（4.7）－ * 10%	密	良 黒褐10YR3/2	
図38－80 図版13	第5トレンチ 5SK03	磁器(染付) 丸椀	（10.0）－ 5.6 －（3.2） 50%	密	良 白N9/0	
図38－81 図版13	第5トレンチ 5SK03	磁器(染付) 端反椀	10.0 － 6.0 － 3.8 90%	密	良 白N9/0	
図38－82 図版14	第5トレンチ 5SK03	磁器(染付) 端反椀	（10.3）－ 5.8 － 3.8 70%	密	良 白N9/0	
図38－83	第5トレンチ 5SK03	磁器(染付) 端反椀	10.2 － 6.0 － 4.0 70%	密	良 白N9/0	
図38－84 図版14	第5トレンチ 5SK03	磁器(染付) 端反椀	10.8 － 6.0 － 3.7 90%	密	良 白N9/0	

表６　実測遺物一覧（3）

挿図 写真図版	出土遺構 層位	種別 器種	口径－器高－底径（cm） 残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
図38－85	第5トレンチ 5SK03	磁器（染付） 端反椀	（10.9）－ 5.8 － 3.9 70%	密	良 白N9/0	
図38－86	第5トレンチ 5SK03	磁器（染付） 椀	* －（3.2）－（4.3） 底部片	密	良 白N9/0	
図38－87	第5トレンチ 5SK03	磁器（染付） 椀	* －（4.4）－（3.9） 底部片	密	良 白N9/0	
図38－88 図版14	第5トレンチ 5SK03	青磁（色絵） 椀	8.3 － 4.2 － 2.9 80%	密	良 白N9/0	
図38－89	第5トレンチ 5SK03	磁器（染付） 端反椀	8.7 － 4.0 － 2.9 70%	密	良 白N9/0	
図38－90	第5トレンチ 5SK03	磁器（染付） 端反椀	（8.2）－ 5.3 －（4.0） 40%	密	良 白N9/0	
図38－91 図版14	第5トレンチ 5SK03	磁器（染付） 端反椀	8.6 － 4.1 － 2.8 100%	密	良 白N9/0	
図38－92	第5トレンチ 5SK03	磁器（染付） 端反椀	（8.7）－ 4.3 － 3.1 30%	密	良 白N9/0	
図38－93 図版14	第5トレンチ 5SK03	磁器（色絵） 小杯	（6.5）－ 2.9 － 2.6 60%	密	良 白N9/0	
図38－94 図版14	第5トレンチ 5SK03	磁器（色絵） 小杯	6.5 － 3.1 － 2.6 100%	密	良 白N9/0	
図38－95	第5トレンチ 5SK03	磁器（染付） 猪口（湯呑）	（7.0）－（5.2）－ * 10%	密	良 白N9/0	
図38－96	第5トレンチ 5SK03	磁器（染付） 小杯	（6.4）－ 3.4 －（3.0） 80%	密	良 白N9/0	
図38－97 図版14	第5トレンチ 5SK03	磁器（染付） 小杯	5.9 － 4.6 － 2.6 90%	密	良 白N9/0	
図38－98 図版14	第5トレンチ 5SK03	磁器（染付） 猪口（湯呑）	7.3 － 6.9 － 4.2 90%	密	良 白N9/0	
図38－99 図版15	第5トレンチ 5SK03	磁器（染付） 猪口（湯呑）	7.5 － 6.9 － 4.2 100%	密	良 白N9/0	
図38－100	第5トレンチ 5SK03	磁器（染付） 徳利	* －（10.5）－ 5.2 30%	密	良 白N9/0	
図38－101 図版15	第5トレンチ 5SK03	磁器（染付） 蓋（段重）	14.2 －（3.5）－ * 95%	密	良 白N9/0	
図38－102	第5トレンチ 5SK03	磁器（青磁染付） 蓋	（9.9）－ 3.8 －（4.5） 30%	密	良 白N9/0	
図38－103	第5トレンチ 5SK03	磁器（染付） 蓋	（10.3）－ 2.7 － 4.0 70%	密	良 白N9/0	
図38－104 図版15	第5トレンチ 5SK03	磁器（染付） 蓋	9.3 － 3.1 － 3.7 80%	密	良 白N9/0	
図38－105	第5トレンチ 5SK03	磁器（染付） 皿	* －（2.0）－（8.0） 底部片	密	良 白N9/0	
図38－106	第5トレンチ 5SK03	磁器（染付） 皿	* －（3.0）－ * 底部片	密	良 白N9/0	
図38－107	第5トレンチ 5SK03	磁器（染付） 皿	（14.0）－ 2.4 －（7.7） 90%	密	良 白N9/0	
図39－108	第5トレンチ 5SK03	陶器 壷	（24.0）－（5.0）－ * 10%	密 ～3㎜石英、長石、クサリ礫	橙5YR6/8	
図39－109	第5トレンチ 5SK03	土師器 焙烙	（31.2）－（3.8）－ * 10%	密	良 橙5YR7/6	
図39－110	第5トレンチ 5SK03	白磁 皿	（10.0）－ 2.0 －（5.7） 30%	密	良 白N9/0	
図39－111 図版15	第5トレンチ 5SK03	陶器 擂鉢	（24.0）－ 8.4 －（11.4） 70%	密 ～5㎜長石、石英	良 赤褐2.5YR4/8	
図39－112 図版16	第5トレンチ 5SK03	陶器 擂鉢	39.7 － 15.9 － 17.0 80%	密 ～１0㎜長石、チャート、クサリ礫	良 赤褐5YR4/8	
図40－113	第5トレンチ 5SK03	石製品 五輪塔（空輪）	* －（8.7）－ 10.8	砂岩		
図40－114	第5トレンチ 5SK03	石製品 五輪塔（水輪）	* － 14.1 － 18.3	砂岩		
図40－115 図	第5トレンチ 5SK03	石製品 五輪塔（水輪）	* － 14.5 －（19.0）	砂岩		
図41－116 図版16	第5トレンチ 5SK04	磁器（染付） 広東椀	（10.8）－ 5.7 － 5.5 60%	密	良 灰白N8/0	
図41－117 図版16	第5トレンチ 5SK04	陶器 丸椀	（11.2）－ 6.8 －（4.5） 70%	密 ～2㎜長石、石英	良 灰白2.5Y7/1	
図41－118 図版16	第5トレンチ 5SK04	磁器（染付） 蓋	10.2 － 2.8 － 5.9 95%	密	良 白N9/0	
図41－119 図版17	第5トレンチ 5SX11	陶器 壷	（13.4）－（6.3）－ * 口縁部片	密	良 にぶい赤褐5YR4/3	中国
図41－120 図版17	第5トレンチ 5SX10	陶器 壷	* －（3.4）－ * 口縁部片	密	良 灰N6/0	東海系
図41－121	第5トレンチ 5SK07	石製品 一石五輪塔	32.2 － 9.4 － 7.7	緑泥片岩		
図41－122	第5トレンチ 5SK05	石製品 一石五輪塔	32.0 － 14.2 － 9.1	緑泥片岩		
図41－123 図版17	第5トレンチ 包含層	磁器（染付） 鉢	（24.3）－ 8.8 －（14.2） 80%	密	良 白N9/0	
図41－124 図版17	第5トレンチ 包含層	石製品 有孔滑石製品	11.6 － 11.9 － 4.9 － 1130g 60%	滑石		

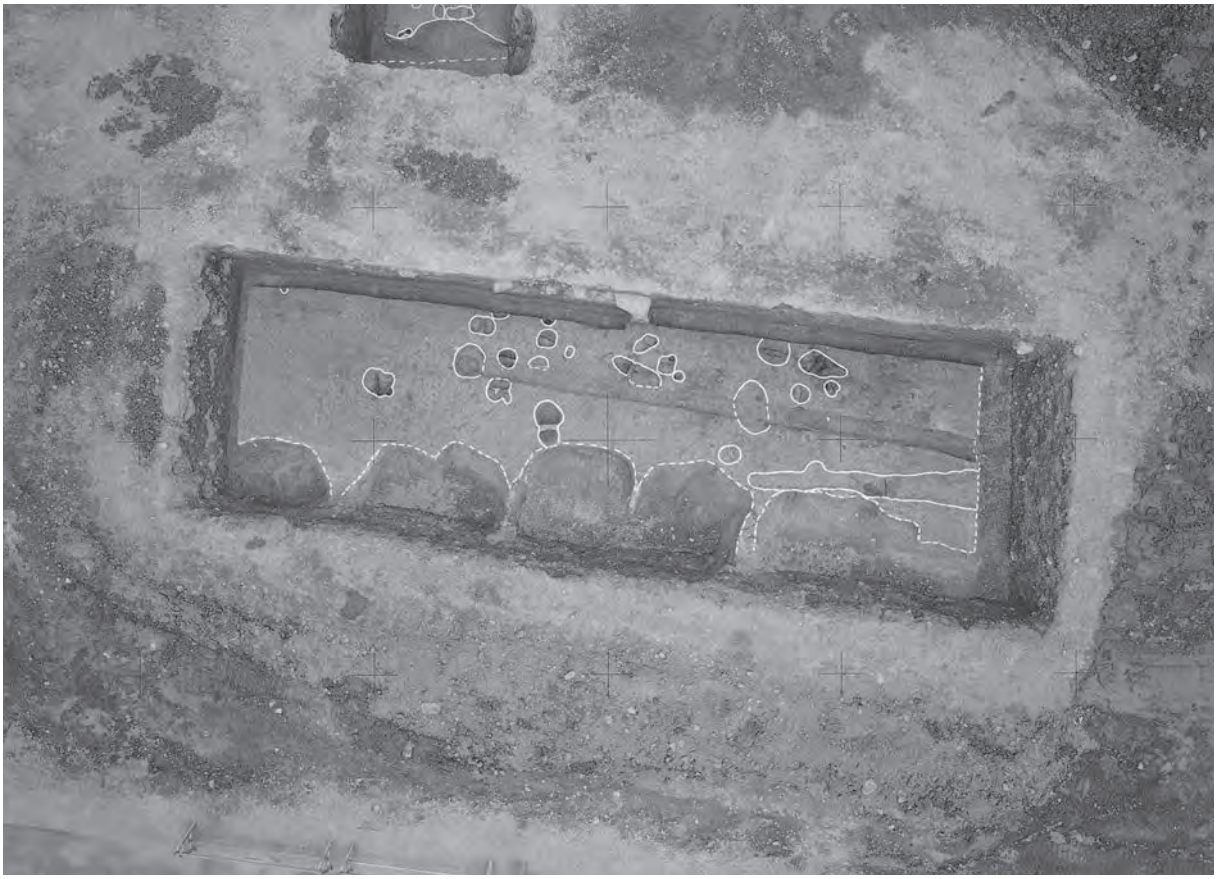
調査区全景（南から）

第 1 トレンチ 1SX03 全景（東から）

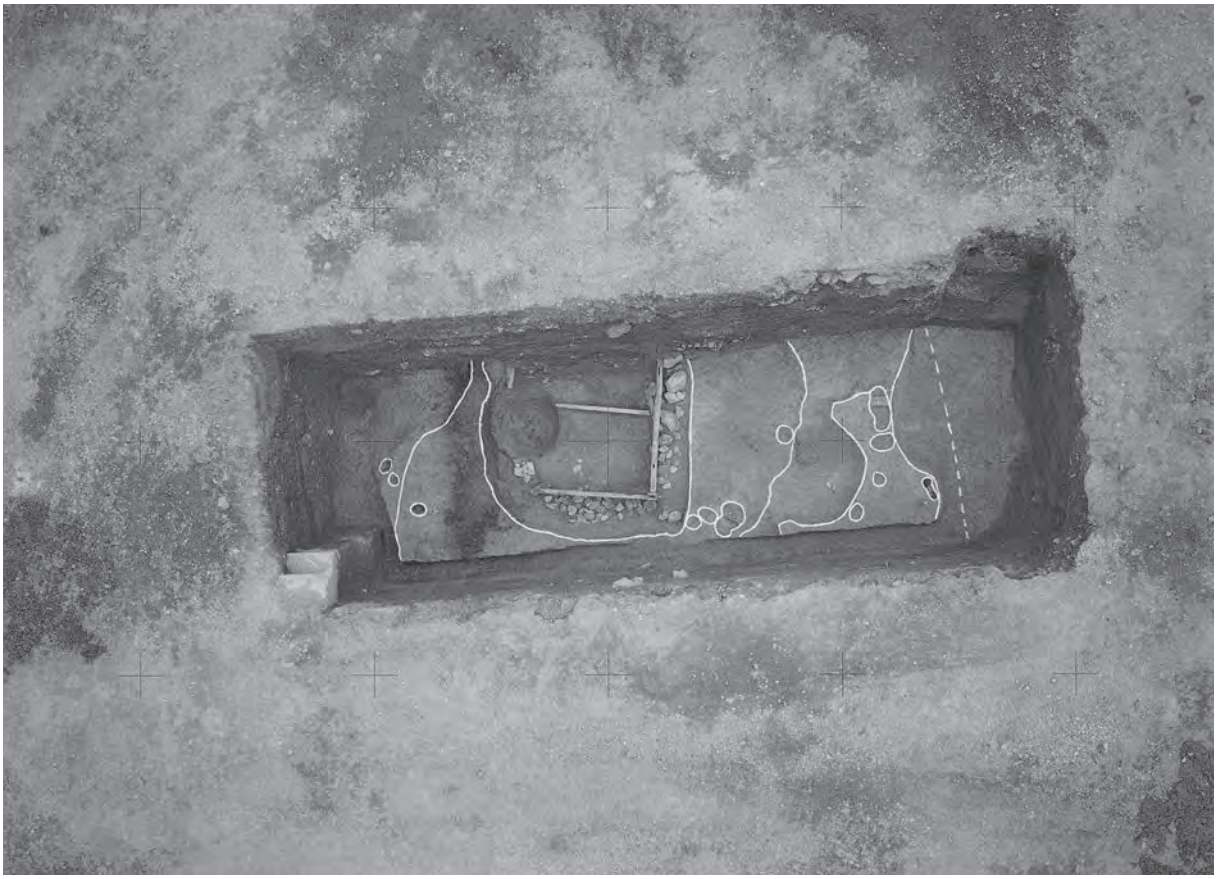
図版 2

第 1 トレンチ下層遺構全景（北から）

第 1 トレンチ西壁（東から）



第 2 トレンチ全景（南から）



第 3 トレンチ全景（南から）

図版 4

第 3 トレンチ 3SX01 完掘状況（東から）

第 3 トレンチ 3SX01 井戸枠木組み（南から）

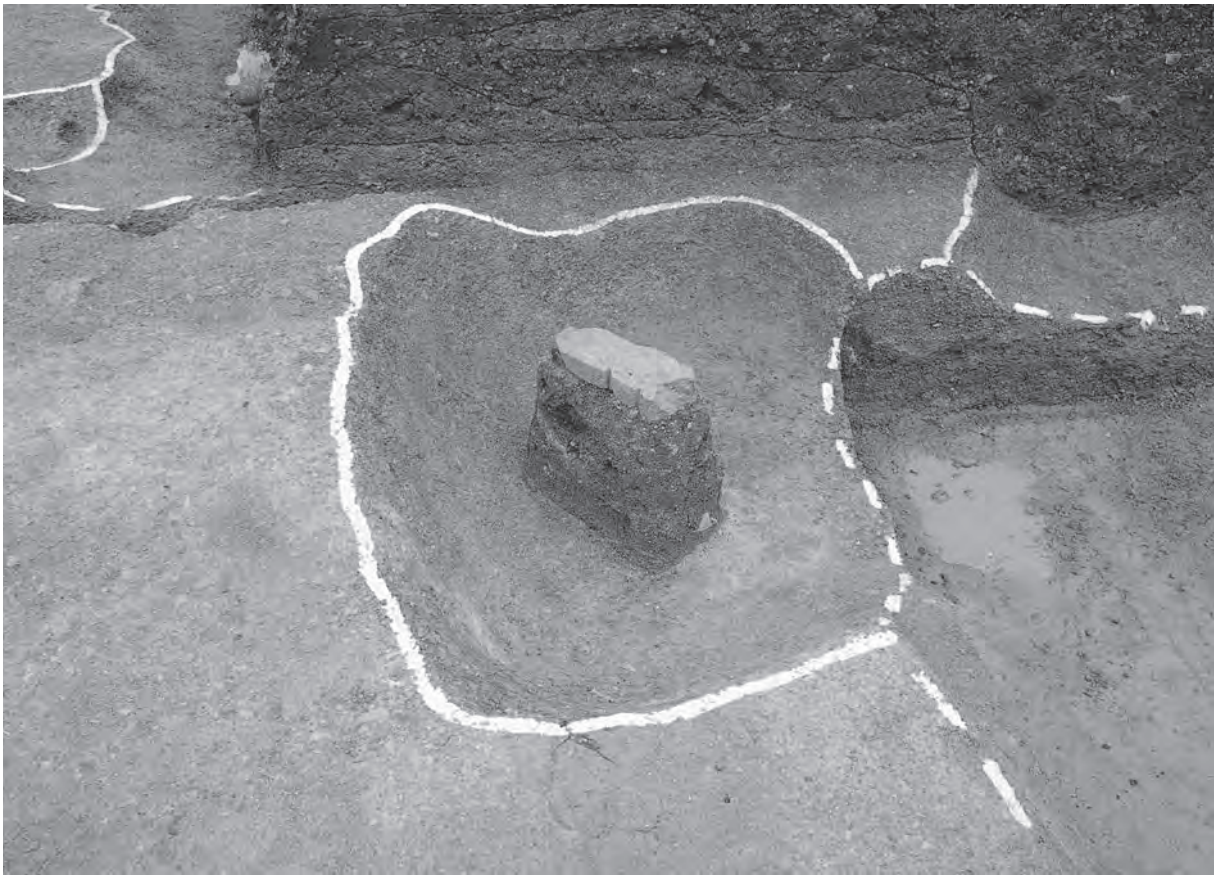
第 4・5 トレンチ全景（北から）

第 5 トレンチ全景（北から）

図版 6

第 5 トレンチ 5SK03 内遺物出土状況（東から）

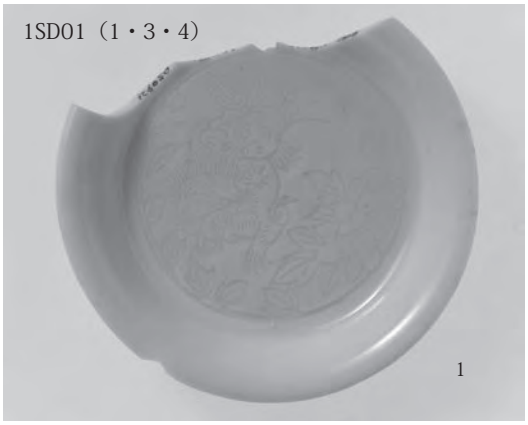
第 5 トレンチ 5SK04 完掘状況（東から）

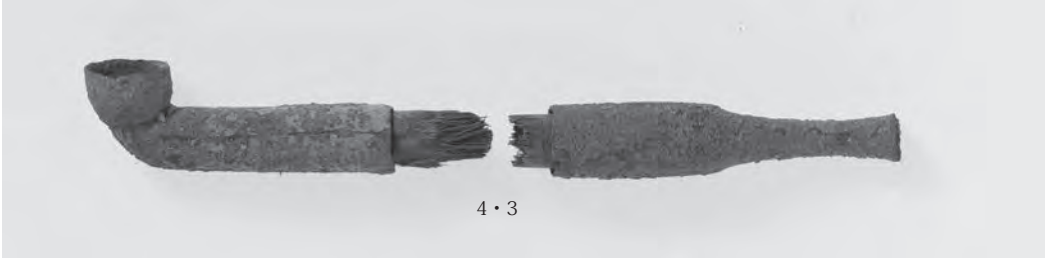


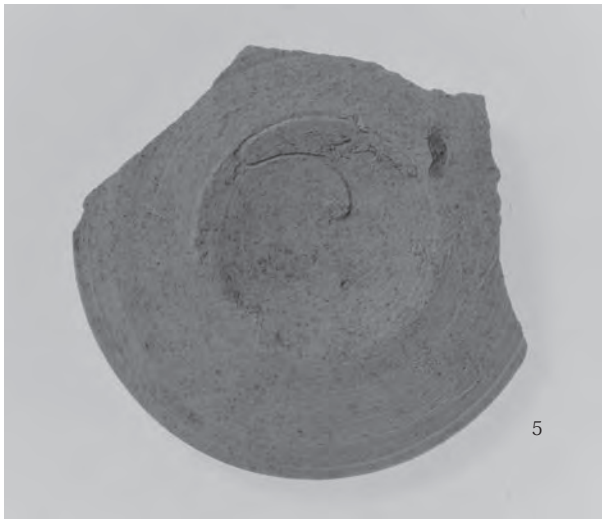
第 5 トレンチ 5SK05 遺物出土状況（西から）

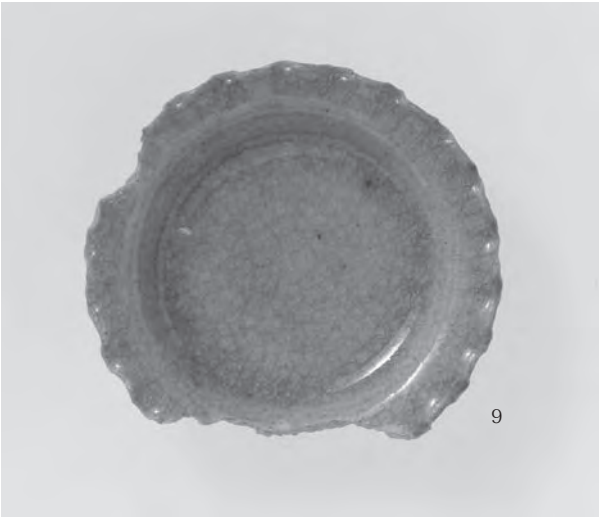
第 5 トレンチ 5SX10 礫集中部（南東から）

図版 8







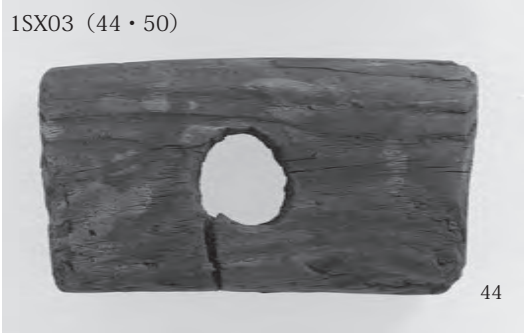


1SX03（11・15・18・20・23・24）

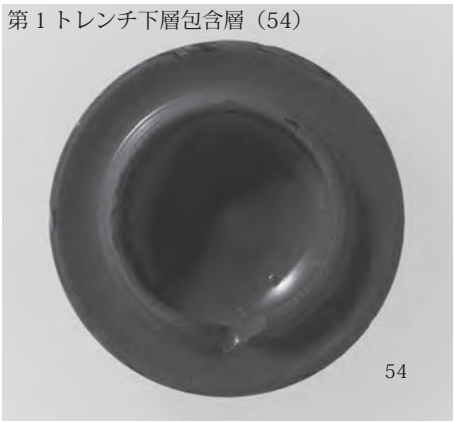
図版 10

1SX03（26・28～30・42）

1SX03（44・50）



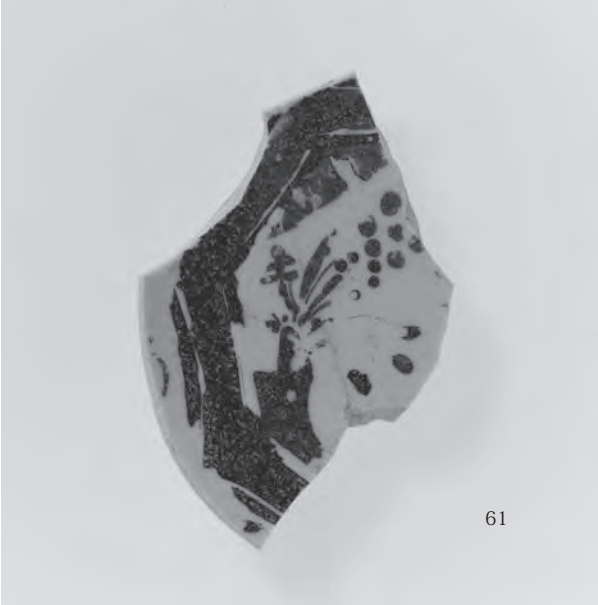
第 1 トレンチ下層包含層（54）

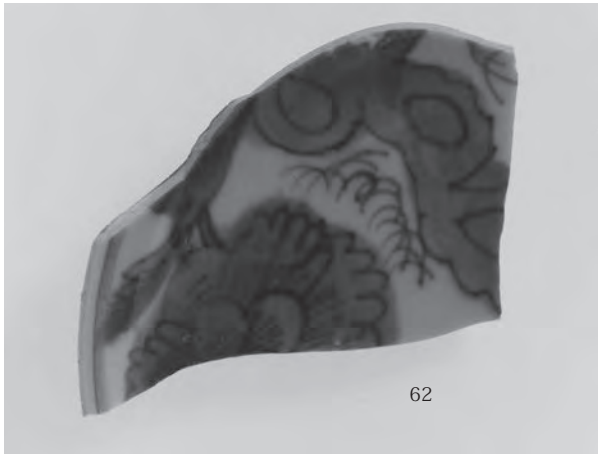


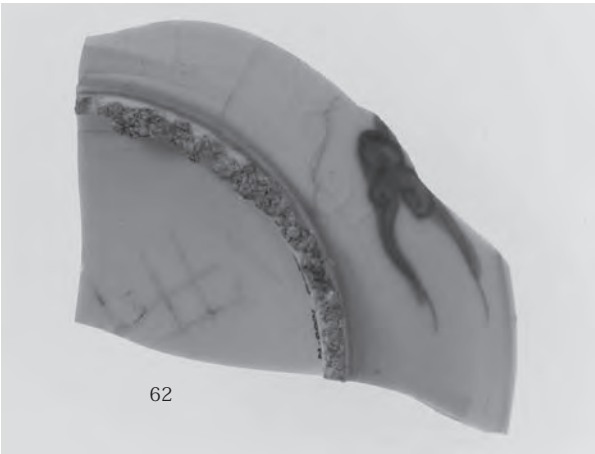
第 1 トレンチ包含層（58）

図版 12

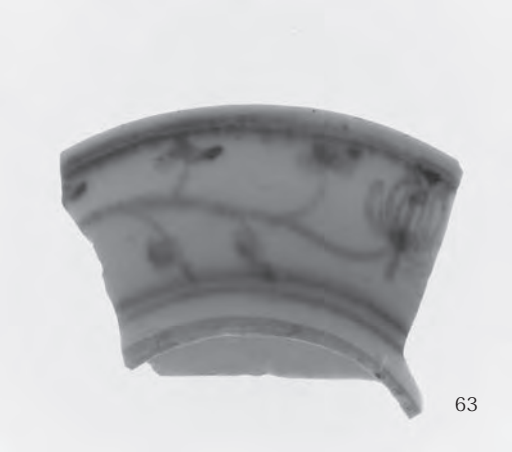
第 1 トレンチ包含層（59 ～ 62）

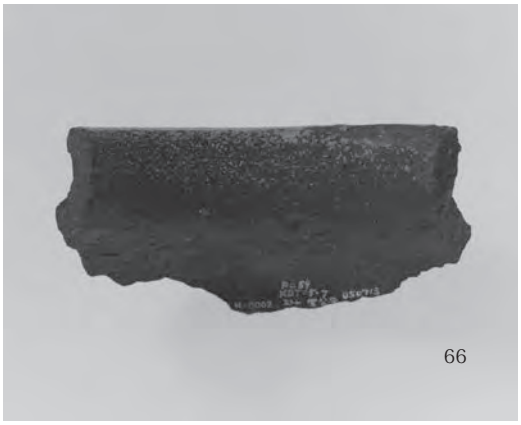


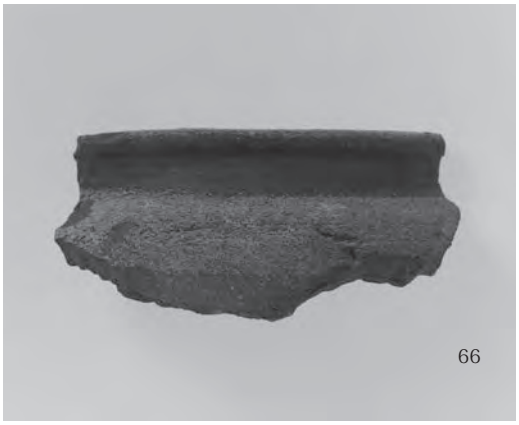




第 2 トレンチ包含層（63・66・67）







5SK03（80・81）

図版 14

5SK03（82・84・88・91・93・94・97・98）

82

84

88

91

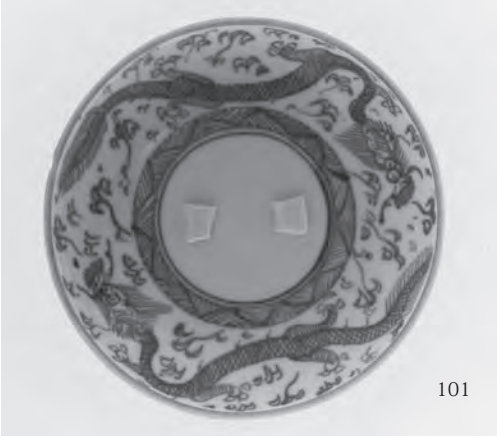
93

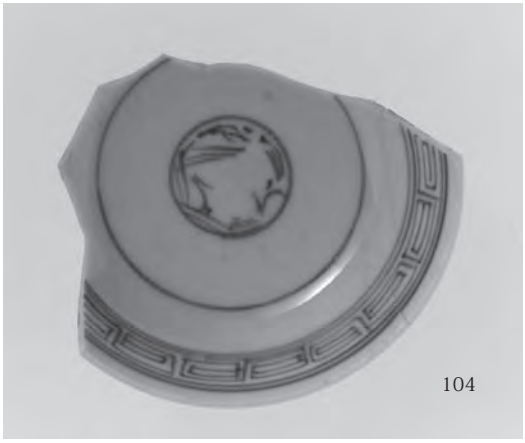
94

97

98

5SK03（99・101・104・111）

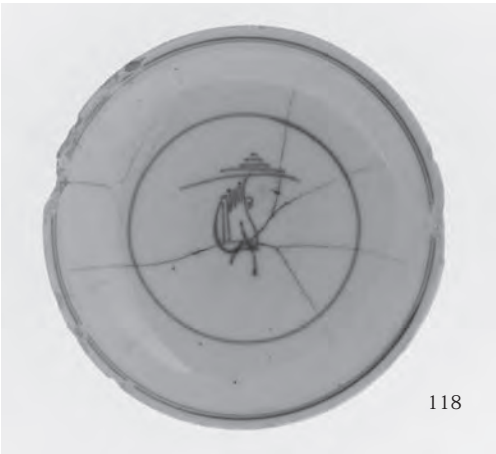




図版 16

5SK03（112）

5SK04（116 ～ 118）



5SX11（119）

5SX10（120）

第 5 トレンチ包含層（123・124）

ふりがな	こんごうぶじいせき
書　　名	金剛峯寺遺跡　KBT05－7
副 書 名	高野山大学松下講堂黎明館建設工事に伴う発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	高野町文化財調査報告書
シリーズ番号	第５集
編 著 者 名	池田一城　　木本誠二　　佐藤亜聖
編 集 機 関	①高野町教育委員会　　②公益財団法人　元興寺文化財研究所
所　在　地	①〒648-0211　和歌山県伊都郡高野町高野山 486 ②〒630-8392　奈良県奈良市中院町 11
発行年月日	西暦　2017 年 3 月 31 日

所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	°′″	°′″	調査期間	㎡	調査原因
こんごうぶじいせき 金剛峯寺遺跡	わかやまけん　いとぐん 和歌山県伊都郡 こうやちょうこうやさん 高野町高野山	3034450	004	34°12′45″	135°35′07″	2005.7.4～2005.8.20	400 ㎡	講堂建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
こんごうぶじいせき 金剛峯寺遺跡	寺院	近世・近代	溝、土坑、井戸、貯水槽	土器・陶磁器、木製品、金属製品、一石五輪塔	

要　　約	高野町小田原谷に属する坊院跡の調査。遺構の大半は近代以降のものである。石積み護岸を持つ溝や、板組の貯水施設が見つかっており、活発な活動が想定される。中世に遡る以降は見られないが、出土遺物の中には中世後期に遡るものが散見され、小田原谷の開発時期について示唆を与える。

高野町文化財調査報告書　第５集

金剛峯寺遺跡

KBT05－7

－高野山大学松下講堂黎明館
建設工事に伴う発掘調査報告書－

2017 年 3 月 31 日　発行

編集 : 公益財団法人　元興寺文化財研究所
発行 : 高野町教育委員会
印刷 : 株式会社　ウイング